伊勢を創った太田小三郎

まえがき

２０１８年は明治元年１８６８年から通算して１５０周年となるので、内閣官房では、
明治１５０年をきっかけとして、明治以降の歩みを次世代に遺すことや、明治の精神に学び、日本の強みを再認識することは、大変重要なことです。このため、明治１５０年」に向けた関連施策を推進することとなりました。

ということになっていたので、政府の事業とは何ら関係はないけれど、私が所属していたＮＰＯ法人伊勢志摩さいこう会（以下、さいこう会）でも何か関連する記念事業をやろうということになり、事務局での議論の結果、明治に活躍した郷土の偉人と言えば、太田小三郎」しか考えられないということになった。私はこの数年、郷土伊勢の明治期以降の歴史を研究していたし、私の曽祖父が小三郎と親交があったという因縁もあり、ある程度の資料は集まっていたので、それらを整理してまとめ、私が講師を務めて講演会を開くことになった。

平成３０年７月３０日さいこう会主催で東京室町の三重テラスにて、同年１２月１７日伊勢商工会議所主催、さいこう会共催ということで伊勢商工会議所にて開講した。私としては、過去を知ることは、未来を知ること」と常に考えながら歴史を調べているので、過去の歴史から、縮小していく郷土がふたたび、活気ある町に生まれ変わるにはどうすべきかを見出したい、見出してもらいたいとの希望をもって講演したつもりではある。その目的が達成できたのかどうかは後日の判断に任せるとして、結果として、郷土の偉人と言っても、最近の小中

学校でも教えていないらしく、郷土の産業を主導する方々でも小三郎の名を知るものはほとんどいないようで、とても残念に感じた。

講座は、古い写真や資料などの画像を多く投影して、口頭で補足説明をするような形式で行ったが、時間の関係などもあり、言い足りないことも多々あったように思う。従って、その時の資料を使用して、言い足りなかった事柄も補足してみる。

平成最後の31年2019年　春

秋田耕司

太田小三郎の資料

私が太田小三郎の名を知ったのは、小学生の頃に副読本として配布された、昭和33年伊勢市教職員研修会編集の 伊勢市のあゆみ」の中に以下のように記述されていたことだった。原文のまま紹介する。文中の 秋田喜助」は私の曽祖父であり、その名を聞いた時には誇らしさを感じていたように思うので、特に、記憶に残ったのであろう。このことが後になって郷土史を研究するキッカケになったのは間違いがない。拙家では喜助の名は代々襲名しており、この時の 喜助」は五代目であり、幼名、熊吉、号を九水と称した。ちなみに私は八代目の分家である。その他の伝記についても知る限りを列挙する。

伊勢市のあゆみ」 参宮鉄道をひらいた人、太田小三郎

伊勢市に汽車や電車がとおるようになったのは、だれのおかげでしょう。もちろん、いろいろな人がそうだんして、みんなの苦心でできたのですが、その中でも太田小三郎さんの力は大きなものでした。

太田さんは、弘化2年（1845）1月28日豊前国の英彦山（今の福岡県と大分県境）に生まれました。父は武士で、兄は勤皇の志士でした。少年小三郎はたいへんおちつきがあり勇気もひといちばいすぐれ、なんでもすすんでやる子どもでした。小さいときから広瀬淡窓（朱子学者、天の命ずる人生に素直に励むことを教える学

問）のところでべんきょうをしました。明治5年、27才のとき、主君の使いで伊勢にきて、はじめて神宮に参拝しましたが、そのとき、もっと神宮をきれいにして、みんなが心から敬うようにしたいと考え、山田に住もうと心に決めました。

その後、古市町の備前屋（太田家）のようになりました。その間、大阪の裁判所につとめたり、東京にも住んで築地造船所をつくったりしましたが、明治19年山田に帰って、神苑会（神宮をうやまう会）をつくり、全国にひろめました。そのころの交通はたいへん不便で、参宮にくる全国の人たちはひじょうな苦労をしてたどりつくのでした。これをなんとか便利にしたいと考え、明治22年数人の人と東京へ行き、お金をつくることに苦心しました。ねっしんに集めたので、皇室からも株式をどれだけか出していただくことができました。明治23年10月　参宮鉄道株式会社」をつくり、つぎの年8月、亀山・一身田間が開通、明治40年10月に国有鉄道となるまで、どんどん線をのばしていきました。その後、明治44年に山田から二見・鳥羽へ行く線が完成しました。

参宮鉄道」のしごとの中で、太田さんはまた、市内に電灯をつけたいと考え、秋田喜助さんたちといっしょに、明治29年　宮川電気株式会社」を作りました。そして明治30年6月、市内に781個の電灯がついたのです。市内の電車は明治35年岩渕から浦田町までが開通、大正3年には宇治橋前までのばしました。このとき、太田さんは70才でした。

このように太田さんは、伊勢神宮を敬い、伊勢市に汽車や電車をとおし、また市民の生活を明るくする電灯をともしたり、 山田銀行」をつくったり、わたしたちの生活にとって、わすれることのできない人です。大正5年9月5日、72才で病気のためなくなりました。墓地は久世戸町にあり、りっぱな仕事をほめたたえた碑は、御幸通り、 神宮文庫」の近くに建てられました。

この記述の元になったのは昭和9年発行の 伊勢度会人物誌」であると思われる。同書は復刻されたため、多くの伊勢市民が愛蔵しており、郷土の人名事典の基本となっている。

伊勢度会人物誌」太田小三郎

系譜　鷹羽寿一郎の三男　別称　匡一号長山　生年月日　弘化3年1月28日　没年月日　大正5年9月5日

享年　72歳　生地　豊前国英彦山　住所　古市　墓地　久世戸蝮尾

事項　家は累代豊前彦山の執当職で、家兄浄典は幕末勤皇の大義を唱え遂に之に殉じた。小三郎沈毅果断、済世の志を有し、少時豊後日田広瀬青村の門に学び、王政中興京都に入り三條相國の知遇を受け明治5年同家の用務を帯び鳥羽藩に至るの途初めて神宮に参拝したが、宮垣の咫尺に肆廛密接し、烟塵叢穢するを見て、深く其の尊厳を褻黷するを憂へ、慨然として廓清の志あり、其後遂に居を山田に定め、同志者大岩芳逸、村井恒蔵両氏と共に拮据年を累ね條画粗成り、後縁あつて備前屋太田氏の嗣となった、常時備前屋は家業殷盛を極めたれど、内には負債山積して居たので、彼は曩きに日田県令たりし松方公の知遇を受け、其後援

により養家の整理を図り枯据十余年にして家運を挽回した。其間坂地に於て大阪上等裁判所に奉職し、又東京に寓居を構へ、川崎正蔵氏と共に築地造船所の創立に従事した。

其後帰国、愈よ山田に永住の志を決し、明治19年有志と計って神苑會を起して之を國家的の事業たらしめ、之を完成して神宮の尊厳を保持した。この顕著なる功績に対しては、曩きに畏くも内閣賞勲局より三組金盃を下賜せられたるが、今度神宮司廳主唱の下に清浦伯爵を総裁として宇治山田市長等発起となり治績を永久に表彰するため神都倉田山に紀功碑を建立した。

又参宮鉄道を発起して現時の盛況に至らしめ、宮川電気鉄道会社を創設して電燈電車事業に及び，今日合同電気株式会社の基をなしたのも、皆其力によったのである。山田銀行を起して金融に資し、産業の発達を図ったことも亦忘るべからざることである。

さらに遡って、同書の種本となったが、明治34年発行三谷敏 一著「神都名家集」ではないかと考えているが？

神都名家集」太田小三郎氏之傳　（古市町豪族）

太田小三郎氏は福岡県豊前国田川郡彦山村、鷹羽氏の三男にして、弘化二年五月廿八日該地に生れ、幼名寿 一郎と称す。固より著名の豪族にして、世々勤王家を以て聞ゆ。実兄某、最も勤王の志厚く、終に幕府

の忌諱に触れて自刃を命ぜられたりと。誰も氏、幼少より父兄の志を紹で、大に成す所あらんを期し、年、未だ弱冠に至らずして東西に奔走し、以て勤む朝政幕議其趣を異にして、攘夷論に唱道せらるるや氏、倍々、奮起して朝野の志士と倶に大義名分を講論し、三條（實美）岩倉（具視）諸公の門に出入して王政の振起に力む、又、曽で小林奉行所に関する用件おびて神都に来る事、数回。偶々、古市備前屋の主婦松女と会見す。松女、怜悧固より人を視るの明あり。氏の 一挙 一動、好く其節に当り言 々句 々皆聞くに足るを以て大に其機智に服し、欽慕措かず家に恰も嗣子無きを以て其家を継がん事を請ふ。氏、之を退くるに忍びず、他日を約して去る。後、再び来て松女に会す。松女前約を履行せん事を迫り、強いて家に止め、終に前言の如く嗣子たらしむ。時に明治5年6月12日なり。

氏、情々、地方の状況を査察し、土地の繁栄を図らんとするには先づ、民心を鼓吹するに如かずと看破するや有志者を勧奨して「交修社」を創設し、社員の醵金（きょきん ある目的のために金を出し合うこと）を以て政治・法律・経済・宗教・教育・及び農工商百般に関する新刊著書を購入し、相互、閲読研究して、智識交換の料に供す。其の発企者は氏を始め、北川矩 一、村井恒蔵、山本伊兵衛、野村四郎兵衛、島田長兵衛、吉川清三郎等の諸氏にして、連日相会して講究に力め、大に得る所あり。

殊に神宮に関する事項に対し、或は、其の筋に建議し、或は委員を上京せしめて、当局者に会見するが如き、着々として、施設経営する所あり。神苑会創設の遠因は、実は是に胚胎す。後、交修社は 一旦、休止せしも、数年間に転入せし書冊六百有余は、濱木安吉氏に托して、今尚、度会高等小学校に保管せり。

志勢同盟会」の組織、又、人心鼓吹の策に外ならず、叙上の人々及び角須田、山本等の志州人士と同盟し明治十五年結社の業、成りて機関雑誌を発行し、或は、地方に遊説員を派遣して政談及学術演説を公開し、且つ、毎月有志者棚相会して、萎靡、振るわざるに至る。

元来、神都の民衆十中の八九は参宮人を以て、基本と為し、時勢の変遷と遭逢するも下流に起業心なきを以て、此の地に於て、殖産興業の隆起を図るも、到底、徒労に属するのみ。故に、其の趨勢に逆らわんより、寧ろ、神宮を戴きて民心を安んずるに如かずとの議有り。（以下、神苑会の始まり）

有志間に唱道せられ、氏を始め、宇仁田宗馨、小川三左衛門、上野五兵衛、西田七左衛門、島田政光、村井恒蔵、竹内善兵衛、村田徳蔵、大岩芳逸、山本伊兵衛、吉川溝三郎、竹内善四郎、藤井清司氏、及び、浦田長民氏等、疑議の上、神苑地開設の事に決し、之を町民に諮るに、一人の異議を挾む者無し。

是に於て、先づ仮事務所を吸霞園内に置き、委員を撰定し部署を定めて、着々会務を処理す。当時、度会郡長 浦田長民氏、仮会頭たりしが、後、神宮宮司 鹿島則文氏、其任に当れり。而して、当町及び郡内各村落より、寄附金を募集し、神宮司庁よりの寄附金を併せて数萬円を得たれば、十九年十二月急工を以て、二見浦に起して、「賓日館」を造築し、廿年二月皇太后陛下を迎え奉り。

廿年七月造苑に着手し、宇治舘町及び山田豊川町外二個町の宅地、一萬九千六百四十余坪を買収し、家屋百六十九戸を撤去せしが、廿二年の正遷宮は眼前に迫り、功業未だ半はならずして、財界の変調に会し、委員等大いに苦慮せしが、氏、奮然起て衆を励まし、自から東京に上りて大いに運動する所あり。遂に、宮内

省よりの下賜金及び各府県有力家の寄附金を得て廿四年完成を告ぐるに至れり。此年十二月開苑式挙行に当たり、故、有栖川総裁殿下より其労を嘉みし、効労章及び御紋章附の御盃を下賜せられたり。斯の大事業を成せしは固より委員諸氏の力なりと雖も其の効労の大半を氏に帰するは神都民衆の〇しく認むる所なり。

参宮鉄道株式会社の創設亦、全く氏の力にして、当時、財界の不振は其極に達し、数十名の発起者を奨めて株式募集の事に方らしめ、自ら上京して大いに運動したる結果、終に、好く資本金七拾萬円の大会社を起し、今日の如く、万民に利便を与え、地方に潤沢を与うるに至れり。氏に次で同会社の為に尽くせしは、宇仁田宗馨及び上野悟 一、北川宗 一、北川矩 一、西田七左衛門、小林久次郎、竹内善壽、井阪徳三郎氏等にして、何れも同会社より三組銀盃 一個を贈り、附するに終身優待 一等乗車券を以てせり。

明治三十三年五月、皇太子殿下御結婚御報告として神宮御参拝の御事あり。有栖川宮威仁親王殿下、亦、御参？列にて御来田の砌みぎり、神苑会の為に特別尽力せし幹事及委員等に御紋章付の御盃を下し賜ひたり。此栄に預りしは、氏を始め宇仁田、小川、竹内、村井、西田、竹内、大岩、村田等の諸氏なりし。

氏亦、山田銀行設立発起者の中に在りて力尽くす事、少からず。凡ろ宇治山田町に於ける萬般の事業の 一として氏を煩さざるものなし。故に、其の践歴を細悉せば積んで巷を成すに至るし。是を以て、氏の伝記は即ち宇治山田町維新後の歴史なり。編者、之を詳にせんと欲するや、切なりと難くも本集の編纂に際し、氏恰も微恙を以て将に在り。遂に之を糺ただすの期を與えず。故に、其知得する所の 一班を記して他日の改訂を待つ事となしぬ。

さらに、国会図書館デジタルコレクションには、次のようなしんらつな記述も見られる。

勢伊志紀顔見評判記：諸名士大 一座」 太田小三郎

三條公の諸太夫たりし因縁から、流れ渉りて牛車楼の親方となりしも、家にとてあらず、小吏となりて各地を遊び、さしたる事がなければ元の古巣に立ち帰り、おかしげな詩なんぞ作り、心のままに暮らせしが、神苑会なる事業から貴紳の間に立入り、幾度か他人の辛苦経営したる、鉄道事業を我物顔して発起したる顔の厚さ、首尾克望みを達して、旨 々と参宮鉄道会社社長となりけり、此人容貌こそ立派なれど、何たる技量とてなく、自尊にして却って膽たん＝肝力に点火、されど能く追随す、小人も時至ればかくなるものにや。

維新史 日子山義僧傳」 45～47頁

みまかりし魂の光のみかかれて　曇りなく世に(顕)れにけれ　古川銕彌

因に記す。殉難士 鷹羽浄典の末弟匡 一なる〇、幼にして気概あり。居、常に実兄浄典が冤殁を哀み、〇に義徒等か遺志を継ぎ、山の正気を回復して、以て大に力を国家に致さんことを期す。年13にして笈おいを負

ひ、豊後日田、広瀬青村の門に学び、博く経史に渉り、兼て詩文を能くし、出藍鵬雛の誉あり。一日機海観潤講義(嘉永年中幕府に於て出版す)を読み、大に悟る所あり。詩書を投して曰く、海外各国の形勢はそれ斯の如し。大丈夫、世に居り、当に人に據よりて以て功を成すべからず。宜しく自から奮て事業を興し、以て海内江へ雄飛すべし。豈あにに区 々たる書巻を繙ひもとき、徒に春花秋月を吟詠して以て自ら足りと為んとやとて、窃ひそかに西洋文明の利器を採りて殖産興業富国強兵の実を講せんことを欲する心愈いよいよ厚し。依て東西に奔走し、各地を跋陟はっちょくして、実業同志者と協合し、偶ま 一の工場を開くも、忽たちまちに 一倒 一顛てんは免れざりしも、毫すこしも挫折せず、益す。心膽たん＝胆を練磨し、経験を積み、考究を重ね、一日も席を温むるの辺あらざりしと。故を以て匡 一は郷里にありても、彼の勤王攘夷等の説に於ては、亦た其の朋友等と其の方途を殊にせし所ありたり。

然れ其の匡 一〇斯る不覇の志を懐いだき、平正旅遇に漂泊せしの際に方り、故山の義徒等か時勢の悲運に陥るのみならず、剰あまつさ江ぇ実兄鷹羽浄典の小倉獄に於て惨死せしとのことを聞き、悲憤慷こう慨、血涙交も至り、直に故郷へ馳せ帰りて、義徒の残余と、〇力し、殉難者の遺族を愍みん援し、前文に記せしか如く、座主教有君を推して上京し、天機を伺い、大に勤王の宿志を表しつつ、遂に僧官を返上して高千穂家を興し、一山の不覇を維持し、豊津藩の覇絆を離れ、神祇官の直轄となり、爾後、日田県の所隷に帰せしめ、以て 一山の故格を完ふせしは、蓋ふたけだし匡 一興りて克く力ありしなり。此等の事件其満足を告げしは、全く匡 一が曽て三條公を始め、殊に貴願の方 々へ交際を有せしにより、匡 一は此等の貴願を訪ふて、其事実を稟牒ちょうし、遂

に其の目的を貫きしと云う。匡 一は既に其の目途を果せり。

別に将来に計画せる所ありて、故友に別を告げ、独り滞京して為す所ありたり。

居2年、伊勢国山田に転居し太田家を相続し、小三郎と改名す。遂に不貲(し)=宝の財産を畜え、巨豪と称せられるるに及えり。

小三郎は敬神愛国の念慮深く、窃に神宮 々域の人家に接近して褻(せつ)=汚れる瀆=涜せるを慨し、神苑会なるを首唱し、宮傍の人家数百戸を購い、之を撤回して広漠の神苑を規画し、大に宮域外を荘厳して、之を神宮宮域に献納し、又た神宮宮域に接続せる民林数百歩を購入し、禁伐林となし、大に神宮宮域の風致を添えたり。

且つ参宮鉄道を設立して、参宮者の便利を與うる等、其の他、山田町百般の事業 一として関係せざるはなく、昔時、山田町の哀願を挽回して、今日の繁盛を来たせしは重に力ありし所なり。

爰(ここ)に明治23年4月3日に於いて、陸海軍大演習の砌りは名古屋へご駐輦(=てぐるま)在らせらるるや、小三郎が積年実業経営の功果は、忝(かたじけ)なくも、名古屋行在所へ勅喚せられ、小三郎は布衣の身を以て、殊に御夜会参列の栄を賜りたりと、嗚呼、小三郎は労を積み、功を累ね、多年、励精せし。富国強兵の術策は、曠(むな)しからずして、遂に斯る天爵の其の身に繕う所とはなれり。

真に我日子山精霊の鐘るところをして、中外に簸(は)揚せしものにあらずして何ぞや、小三郎は又た次て明治29年の夏、故山に帰省し、大に郷里の為に、製産興利の方法を経圖せしこと 一にして足らざりし、于時殉難

諸友が招魂場は、忝なくも官祭に加る所となりたり。為めに其の建祠費へ多くの金円を寄付し、猶おも有志を募りて永末維持の財産を計画なしたり。其れと同時に、本編をも出版して、普く有志者へ頒布せんとす。於此の本編か始めて世上に顕れ、義徒の偉蹟を千載不朽にせしを得しは、全く、太田小三郎其の人の力なりとす。聊(いささか)之を附言す。

ョトバンク」 太田小三郎

1845―1916 幕末―大正時代の尊攘運動家、実業家。弘化2年1月28日生まれ。鷹羽浄典(たかば じょうてん)弟。広瀬青邨(せいそん)に儒学をまなび、三条実美(さねとみ)の知遇をえる。明治19年伊勢神宮の尊厳を保持するため神苑会をおこす。参宮鉄道、山田銀行などの創設にかかわった。大正5年9月5日死去。72歳。豊前(ぶぜん)英彦山(ひこさん)(福岡県)出身。

太田小三郎を論じる時、基本的な資料はこの程度しかなく、特に、幼年期から伊勢に来訪するまでについては不明な点が多かった。そんな時、さいこう会の飯田副理事長の執念の調査によって、幕末秘史 英彦山殉難録」を発見するに至たり、「小三郎」が何故、郷土伊勢において偉業を成し得たのか、その解明を果たせることになった。以降、講座の主旨に従い、「小三郎」の年齢を軸に、展開していく。

残されている肖像は、(上)伊勢市明治百年展目録 より、(下) 名古屋市在住 鷹羽氏より伊勢市に寄贈の肖像画があるが、この2つは対照的な姿のように思う。御本人は上の写真のような温厚な人柄だったように感じるが？鷹羽氏は小三郎の曾孫に当り、鷹羽本家を継承されている。下の肖像画の落款は。 明治二拾九丙申 一月 紅蓼居」と記されている。この画人について調べてみたが、見出すことは出来ていない。

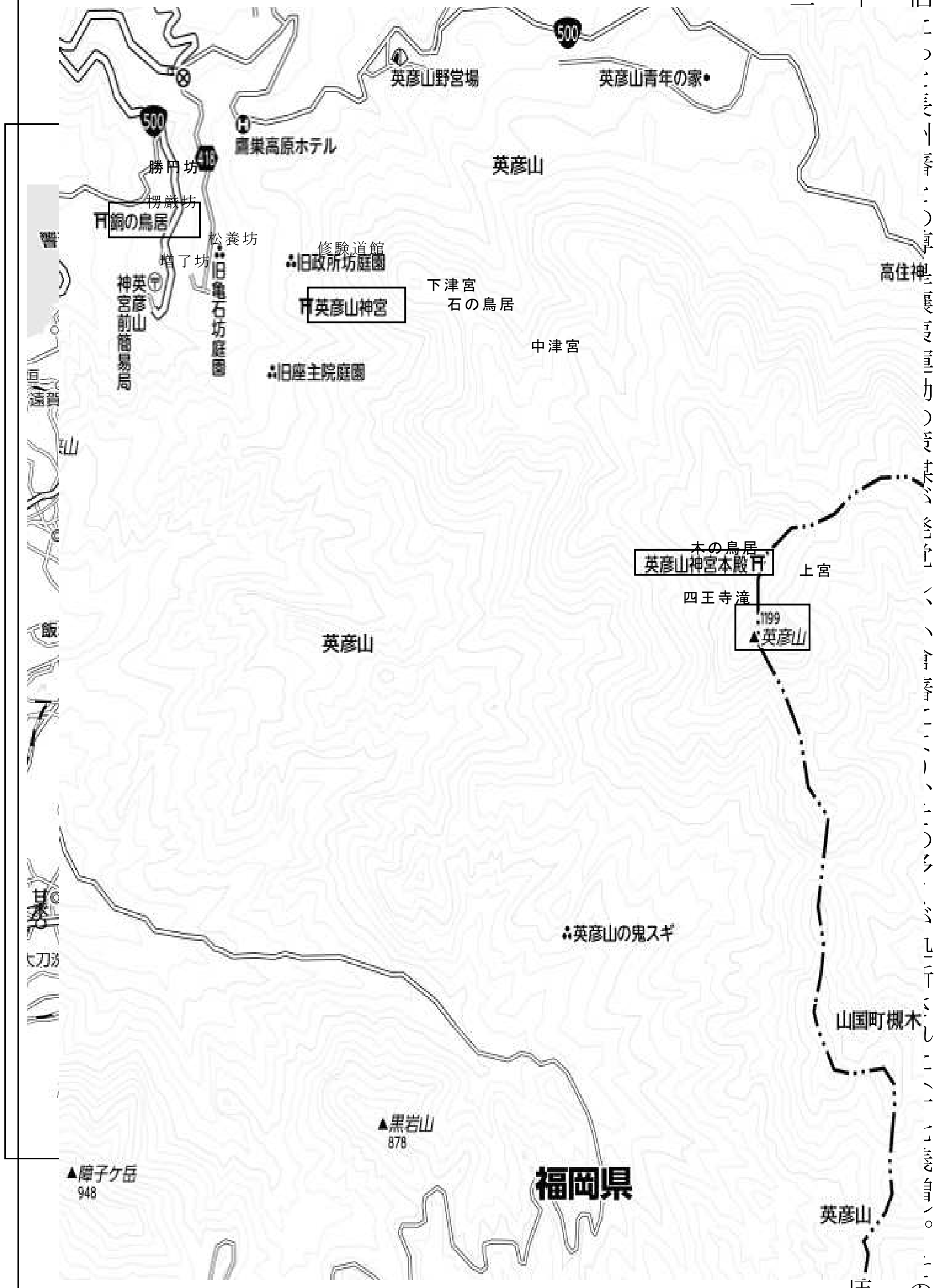
鷹羽匡 一」誕生 弘化2年1822

太田小三郎のもとの名前は鷹羽たかば匡 一である。匡 一は福岡県豊前国田川郡彦山村英彦山にて、鷹羽寿一郎の三男として誕生した。生年月日は、神都名家集では弘化2年5月28日、伊勢度会人物誌では弘化3年1月28日、とあるが、久世戸墓地にある墓石には、 生は弘化2年正月廿八日」と刻字されていることから、生年月日は弘化2年1月28日である。明治維新の23年前のことであった。また、神都名家集の寿 一郎の名は誤りで、それは父の名である。匡 一の当て字は後述の 英彦山殉難録」には 狂 一」とも記載されている。

生地の福岡県豊前国田川郡彦山村、つまり、 英彦山」ひこさんは、福岡県東部と大分県北部の県境にあって、日本三大修験の霊場、修験の別格本山 霊仙寺」のことである。この地は小倉藩の管轄ではあったが、聖地として自治が認められていた。この 霊仙寺」の始祖は皇族の出であり、もともと尊王思想が強く、幕末には、座主であったのちの高千穂教有きょうゆうの母が関白 一条忠良ただよしの息女で三条実美さねとみの祖父公修きんおさの養女(つまり、実美の叔母)であったことなどもあり、霊仙寺は長州との連合を画策して、王政復古に尽力した多くの尊王の志士を輩出して倒幕運動を激しく行った。

一方、この地を管轄していた小倉藩は、初代藩主 小笠原忠真ただざねの母が家康の孫にあたり、西国譜代大名の筆頭として幕臣中の幕臣であった。そのことから両者はするどく対立した。幕末に霊仙寺の勤王倒幕の僧

侶
中
一



500
英彦山野営場
英彦山青年の家
鷹巣高原ホテル
416
勝円坊
楞厳坊
銅の鳥居
松養坊
増了坊
修験道館
旧政所坊庭園
旧亀石坊庭園
英彦山神宮前簡易局
英彦山神宮
下津宮
石の鳥居
中津宮
旧座主院庭園
英彦山
高住神
木の鳥居
英彦山神宮本殿
上宮
四王寺滝
1199
英彦山
英彦山の鬼スギ
山国町槻木
黒岩山
878
障子ケ岳
948
福岡県

匡
の

この後の小三郎の活動には、三条実美との因縁が深いため、その略歴を記す。

三条実美

実美は天保8年1837に、父 贈右大臣であった実万さねつむ、母 土佐藩主・山内豊策の娘 紀子の四男として生まれたが、故あって家督を継いだ。三条家の家格は、摂政・関白と三公（太政大臣・左大臣・右大臣）を輩出する摂家（摂関家）5家に次ぐ 清華せいが」9家の1家ではあったが、内大臣以上にはなれないのが通例であった。

年齢的には同時期に活躍した、岩倉具視は12歳年上、西郷隆盛10歳、吉田松陰・大久保利通7歳、木戸孝允4歳、坂本龍馬・井上馨2歳、徳川慶喜・板垣退助は同年、中岡慎太郎・山形有朋・大隈重信は1歳下、高杉晋作2歳下、第2代総理大臣黒田清隆3歳下、伊藤博文4歳年少がいる。

安政の大獄で処分された父実万と同じく尊皇攘夷（尊攘）派であったため、文久3年1863には公武合体派の皇族・公卿と薩摩藩・会津藩らが連動した 八月十八日の政変」により朝廷を追われ（官位を剥奪され）、京都から長州・太宰府へ逃れた。（七卿・五卿落ち）。この間も、急進的な尊攘活動や提言を行って、人心を集め、若くして王政復古の時代にリーダーシップを大いに発揮した。坂本龍馬が主導したと言われる 薩長連合」も、実美や五卿の側近中岡慎太郎が太宰府にて画策したものだった。

慶応3年1867の王政復古で表舞台に復帰し、成立した新政府で議定、翌、慶応4年1868には副総裁、明治2年に太政官制（内閣制度ができる前の政府の中枢組織）が導入されて右大臣、同4年には太政官制度における太政大臣（明治最初の宰相）となり、明治18年太政官制が廃止され内閣制度が発足し、初代伊藤博文が内閣総理大臣になるまで18年間以上、日本の政治を牽引してきた。その後の総理大臣の在任期間を考えるとその期間は途方もなく長く、明治以後の日本を形成した功績は大いに再評価されて良いだろう。明治24年インフルエンザに罹患し55歳で死去した。

鷹羽家は代々、英彦山の 執当職」であったという記載があるが、 執当職」とは如何なる職種であろうか？英彦山殉難録」では、幕末の英彦山内部の行政機構については、座主ざすを 一山の主宰者とし、役僧が最高責任者として山務を運営していると記述されている。

座主」とは、英彦山及びその末寺70ヶ所の総管領。法親王家の血族相伝世襲とす。

役僧」とは、執当、年番、奉行坊、作事奉行、山奉行、町別当の六役を総称した。記述の順位通りに位があったと思われる。

執当」とは、近世中期に設置された役で、最初は座主の御用人格であったが、後に、 一山の政務、人事、外政の 一切を掌握するようになり、それまで祭務についての長であった 年番」奉行をも指揮するようになった。すなわち、英彦山の家老職である。

「奉行坊」とは、中世、世襲座主が決まるまでの一山の主宰者であったが、一山の神事、法会を司り、社寺の修補、諸国との交渉、末山の紛争の裁決などを行うものであり、その中から一年交替で「年番」奉行が選出された。この年番奉行が執当とともに英彦山の政務の中核的存在であった。

「作事奉行」とは、当初は奉行坊が兼任していたが、近世に新設された。用度、営繕、調達方の責任者。

「山奉行」とは、山内の山林管理の担当者。

「町別当」とは、英彦山の門前町の商人や旅行者を取り締まる町方役。

同書の23烈士志の記には、政所有縣は英彦山修験の執当職にあり、政所坊と称す、とあり、いかにも一山の政務を執当していたと思われる。鷹羽浄典は正応坊観道と称し、淡窓の門で学び、座主家(のための)執当とあるので、伊勢度会人物誌にある「家は累代豊前彦山の執当職」というのは、鷹羽家は累代座主執当職であったと考えられる。

明治元年の神仏分離令により、「霊仙寺」を廃し、高千穂家を興して、天照大神の子、天忍穂耳命あまのおしほみみのみことを祭神とする「英彦山神社」に改宗したが、「日子山義僧伝」によると、これにも三条公との知遇と小三郎の尽力がなければなし得なかったことだった。この地は宿敵、小倉県を離れ、一時、政府直轄地となったが、さらに日田県に編入された。昭和50年「英彦山神宮」となった。

幼年期(~16歳) ~万延元1860

この時期、幕末の歴史を列挙してみる。(フリー百科事典「ウィキペディア」参照)と、

弘化元~4年1844~47(誕生~3歳)フランス・アメリカ・イギリスなどが通商を求める。

嘉永元~6年1848~53(4~9歳)黒船来航

安政元~万延元年1854~60(10~16歳)日米和親条約締結、安政地震、安政の大獄、桜田門外の変

と、江戸幕府は外国から開国を迫られ、内政的にも動乱の時期であり、尊王攘夷活動が盛んになる状況であった。

「伊勢市のあゆみ」には、少年小三郎はたいへんおちつきがあり勇気もひといちばいすぐれ、なんでもすすんでやる子どもでした。小さいときから広瀬淡窓(朱子学者、天の命ずる人生に素直に励むことを教える学問)のところでべんきょうをしました。また、「伊勢度会人物誌」には、少時豊後日田広瀬青村の門に学び、とある。

広瀬青村(邨)せいそんは広瀬淡窓の義子で、幕末・明治の書画家であり、淡窓の門で学び、詩を能くし、書にも優れ、画にも巧みで蘭竹を好んだ、という。本名は矢野範治、字は世叔、生没は文政元1818~明治17年1884、享年66歳である。

父、広瀬淡窓たんそうは、生没天明2年~安政3年1782~1856、享年74歳。諱いみな(生前の実名)は建。儒学者、漢詩人、教育者であり、筑前国の亀井南冥、昭陽父子に師事し、豊後国日田に日本最大級の私塾

桂林荘」のち 咸宜園（かんぎえん）」を文化2年1805に開塾した。この私塾は明治30年1897まで継続した。

匡 一は13歳の頃、この 咸宜園」で広瀬青村に師事し学んだということである。

余談ではあるが、その青村の弟の子孫 広瀬正雄は日田市長・衆議院議員、その子 広瀬勝貞は大分県知事となっている。

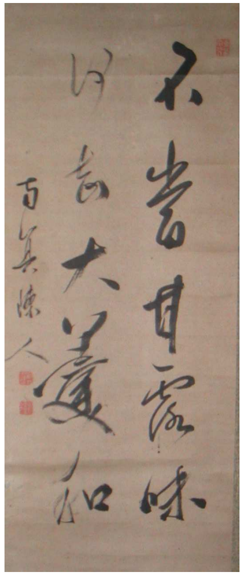
塾があった日田は英彦山の大分側に位置し、英彦山は小倉藩との関わりより幕府の直轄地であった日田との関係を好んだという。廃藩置県の時に小倉県に編入されるのを嫌って、英彦山は日田県となったことがある。

明治になって、日田県の初代知事はのち、第4代と6代の内閣総理大臣を務めた 松方正義」であるが、のちにこの関係が匡 一を救うことになる。

現在の英彦山神宮の本社と奥社

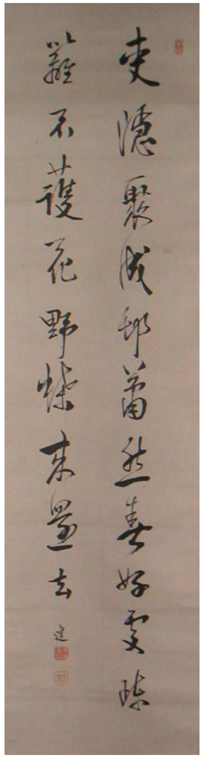
次は拙家に伝わる掛軸であるが、小三郎との繋がりを感じられる。

不當甘露味 何知大羹（あつもの）和



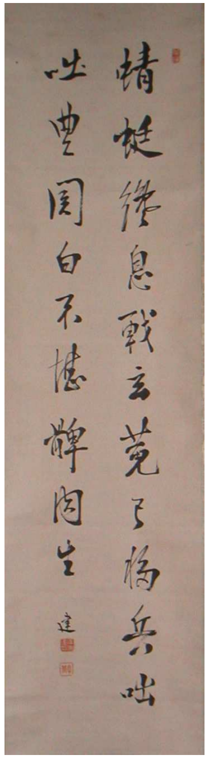
（亀井）南冥陳人

吏隠聚成郁蕭然春好處疎 籬（まがき）不護花野蝶来還去



（広瀬）建

蜻蜓（せいてい（飛ぶ範囲が広い））終息戦玄苑（めん）己移兵咄（しかる） 咄豊関白不堪髀（もも）肉生



（広瀬）建

幕末青年期（17～22歳） 文久元～慶應2年（1861～66）

文久・元治1861～64（17～20歳）の時期、幕末の歴史を列挙してみる（フリー百科事典 ウィキペディア」参照）と、

ロシア対馬占領事件

家茂と皇女和宮の婚礼

長州藩が外国艦隊に砲撃薩英戦争

池田屋事件

八月十八日の政変（開国攘夷派の薩摩藩が長州藩の攘夷親征計画に対抗し、三条実美ら破約攘夷派の公家および長州藩を京都から追放した事件）

禁門の変（蛤御門の変とも、京都を追放されていた長州藩勢力が、会津藩主京都守護職松平容保らの排除を目指して挙兵し、京都市中において市街戦を繰り広げた事件で、英彦山の修験僧も参戦している。

など、日本は混乱期の絶頂を迎え、匡 一にとっても身近な英彦山もそれに巻き込まれてない訳ではなかった。この動乱の安政6年頃、匡 一は15歳となり、昔の習慣の 元服」つまり成人となっている。この前後から、尊王の志士としての活動が開始されたのではないだろうか？

伊勢度会人物誌」には、王政中興京都に入り三條相國の知遇を受け、との記述があり、 神都名家集」には、幼少より父兄の志を紹で、大に成す所あらんを期し、年、末だ弱冠に至らずして東西に奔走し、以て勤む。朝政幕議其趣を異にして、攘夷論に唱道せらるるや氏、倍々、奮起して朝野の志士と倶に大義名分を講論し、三條實美・岩倉具視諸公の門に出入して王政の振起に力むとある。また、 殉難録」には、義徒の中で（小倉藩の）発覚を免れた者もあり、（小倉藩の弾圧を知り）鷹羽匡 一のように急に馳せ帰った者もあって、云々、との記述をみると、匡 一は父・兄と同様に、勤皇の志士として、三条実美や岩倉具視のために、英彦山外の諸国同士との伝令役や調査など、いわゆる御用人のような役割りを果たしていたと思われる。若輩ということもあったかも知れないが、地元英彦山での活動はなかったために、小倉藩による弾劾を免れてたように推測される。

明治青年期（22～28歳） 慶應2～明治5年（1866～72）

さらに時代を下って、慶應から明治初年頃の歴史を列挙してみると、

慶應年間1865～67（21～23歳）には、ええじゃないか発生。

慶応3年1867 大政奉還

慶応4年（明治元年）1868 王政復古し明治政府が樹立したが、明治政府と旧幕府との戦い、つまり、鳥

羽・伏見の戦い（明治元年に終結）が起こり、さらに戊辰戦争（明治2年に終結）などの動乱が続いていた。

そのような情勢の中、八月十八日の政変で追放されていた尊王攘夷派の中心であった三条実美は慶応3年、王政復古の大号令の前夜、朝議にて赦免され官位や諱が復され、太政大臣や内大臣となり、明治政府の要職、実質的にはトップに就いた考えられる。

京阪70年のあゆみ」を出典とする 中部のエネルギーを築いた人々 京阪電鉄の事業を基礎に、大同電力副社長、合同電気社長など電気事業経営に関わった太田光凞（小三郎の養嗣）」記事には、 養父太田小三郎は、維新の際、王事に奔走し、三条実美の 徴士」となった、との記述がある。 徴士」とは、慶応4年の三職分科の制によって生れた明治政府初期の議事官のことで、各藩および民間から有才の者が選ばれ、下しもの議事所の議事官として太政官に出仕した。今でいう政務官や秘書官のような役割りだった。

従って、動乱の幕末から明治になっても、匡 一は三条実美のために日本各地を奔走していたと思われる。

そのような中で、明治政府は、

明治元年 五箇条の御誓文の発布

明治3年 天皇に神格を与え神道を国教（国家神道）と定め伊勢神宮を国家の本宗とし、祭政 一致の 大教」が宣布。神仏分離令が発布。その結果、廃仏毀釈運動が盛んになり、明治4年前後まで続いた。

明治4年 廃藩置県を行い、中央集権化が図られ、政治体制が整えられた、

これに伴って、明治政府は伊勢神宮をふさわしい姿にするため、神宮改正を行った。その内容は、御師の廃止、檀家への大麻（御札）配布を禁止、神宮司庁（伊勢神宮の事務機関）の新設、近代社格制度制定（神職の世襲廃止、神官の叙爵（爵位を授けられること。初めて従五位下に叙せられること。）制度を廃止して士・民籍に編入、などが行われた。

明治5年 教部省設置され、神道国教主義に立脚した神仏混合の国民教化運動（大教宣布運動）を行った。

けれど、 伊勢度会人物誌」に、 明治5年」同家の用務を帯び鳥羽藩に至るの途初めて神宮に参拝した。また、 神都名家集」では、曽で小林奉行所に関する用件おびて神都に来る事、数回。との記述を見ることが出来る。 明治5年」に関しては後述する。

同家とは相国しょうこく（首相の官職）三条実美のことである。この時の用務とは何か？推測の域を超えないけれど、この頃、実美の目的は、明治天皇が明治新政府の旗頭として、威厳を発露して、新生日本の祭政 一致という基本理念の中心を成すことを国民に広く知らしめようとしたものではなかったか？明治初年の国民は江戸の将軍は良く認知していたけれど、天皇のことについてはほとんど認識がなかったという。そのためのアピールとして、天皇が行幸を行うことが実美の策だったのではないだろうか？

しかも、明治2年は、新生日本の本宗となった伊勢神宮の第55回式年遷宮の時であり、東京行幸（実質の遷都）中に、史上初めて伊勢神宮を参拝するのは絶好の機会であったに違いない。、それを画策したのは、同行した右大臣三条実美であり、その下準備を整えたのが匡 一であったと考える。

明治3年頃、匡 一は伊勢に転居す。

維新史 日子山義僧傳」には、居2年、伊勢国山田に転居し太田家を相続し、小三郎と改名す、との記述がある。備前屋に入籍したのが明治5年とすると、その2年前から伊勢に居を構えていた可能性がある。明治5年の天皇の2回目の参拝のお膳立てをしていたのではないだろうか？

伊勢神宮の所管は、現在の伊勢市の郊外、御薗町小林おばやしにある山田ようだ奉行所が行っていた。従って、同所を訪問するのは、天皇参拝のお膳立てをしたものだと考えて良いと思う。一方、伊勢度会人物誌」の鳥羽藩に至る、との記事については、同奉行所は鳥羽港の整備や船舶の点検などの用務も行っていたため、鳥羽藩では、同奉行所とともに、天皇の海路からの行幸行程の安全を願うもので無かったか？明治5年には、天皇が2度目の伊勢神宮参拝を 海路」で行っているが、その頃、鳥羽港沖には外国船が出没していたため、天皇を安全に行幸させるための情報を入手する目的があったのだろう。

結果として、明治5年には明治天皇が2度目の伊勢神宮を参拝することとなったが、この時は海路にて二軒茶屋より上陸し、参拝している。かように、明治新政府を主導した三条実美のため、匡 一は伊勢を何度も来訪したことに間違いはないだろう。

明治政府が立案した祭政 一致の政策のため、その中核を成す神都宇治山田は、自治組織であった宇治会合えごうと山田ようだ三方が廃止され、明治元年、度会府が設置され、府知事には攘夷派の公卿であった橋本実梁さねやなが就任した。東京府と同様に府となったのは、明治政府が伊勢神宮を重要視した現れである。

そのような混乱の中で、伊勢神宮は明治2年第55回式年遷宮を挙行している。この時の費用は、従来の所管だった山田奉行所が負担したとも言われている。明治政府にその余裕が無かったらしい。余談ではあるが、この機会に対し、度会府は参道にあたる仏閣の取り払いを命じ、神領内からの仏教追放政策を推進、196ヶ寺が廃寺にはなったが、50余寺が残存した、とよく解説されるけれど、廃寺になった寺は古来、神官が建立したものが多く、本来、仏教宗派の寺は存続しているように思われる。（正確な調査を待ちたい。）

明治政府の方針により、神都の経済を長く支えてきた御師が廃絶されたことが、古来、栄えていた宇治山田を始め、遊里古市にも大きな経済的打撃を与えたと思われる。

明治政府はその時期（明治５年）、新橋-横浜間に鉄道運行を開始、富岡製糸工場が創設など、交通網の整備や産業革新を着 々と推進している。

伊勢度会人物誌」の続きの記述によると、

明治５年同家の用務を帯び鳥羽藩に至るの途初めて神宮に参拝したが、宮垣の咫尺に肆廛密接し、烟塵叢襍するを見て、深く其の尊厳を褻瀆するを憂へ、慨然として廓清の志あり、とある。

これまで経緯から推測すると、 明治５年に初めて神宮を参拝」ということには、納得し難く、匡　一は慶應期頃から明治５年まで、何度も伊勢を来訪していると思われ、その間、伊勢神宮に参拝したことはあったに違いない。

その時 々で、内宮では宇治橋内の神域の正宮近くまで、外宮でも 一ノ鳥居・北御門前には民家（多くが明治４年に廃絶された御師や神職の家屋など）が建っていて日本の本宗であるはずの伊勢神宮に、その尊厳がない窮状であることを知って、匡　一がその改善の意欲を芽生えさせたと推測しているけれど、 宇治山田市史」の神苑会の項には、

神宮の尊厳は宮域の壮麗と神苑の整備とによって保たるること多き、今更、蝶々の要を見ない。然るに、今古以後、神聖なる境域に、汚穢の民家が立交り、屋宇駢列して屡しばしば、火災の厄を招いたので、万治・寛文の火災に寒心した徳川幕府は、局部改修の土功を施したことがあり、天保の火災に鑑みて、三條大納言実萬さ

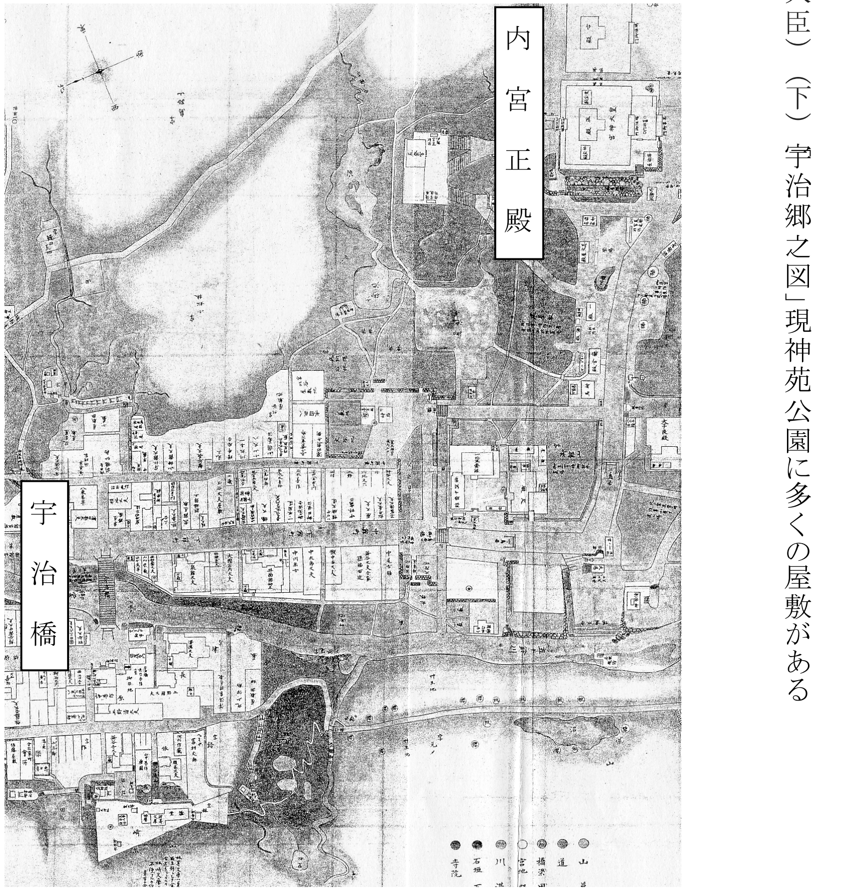
ねつむ卿（実美の父）が館町の 一部の撤去を断行せしめられたことがあったけれども、其等姑息な施設は未だ以て宮域の神聖・尊厳を保ち、不慮の災に備うるに十分でなかった。

との記述があり、神宮神苑の整備は、江戸幕府、京都朝廷共通の願いであって、特に三條家がその実現を強く願っていたということなのかも知れない。従って、匡　一が神宮参拝時にその状況を憂いたというよりは、三條公の願いを遂行することを担ったのではないだろうか？いずれにしてもその実行には時を待たねばならなかった。

また、神苑の整備の目的は、単に崇敬の念を抱かせるような神聖な環境を保つためだけだったということではなく、過去の災害の経験により、周辺家屋からの類焼を防止したいという切なる目的があったことを忘れてはいけないだろう。実際に、外宮では明治３４年に民家を撤去したのち、 一志町沿道の民家から失火し、火勢が道路を隔てた造苑地域の板囲いを燃焼するということがあった。

江戸末期に内宮の正宮近くまで御師の館や民家があったことは、文久元年１８６１横地長重作 宇治郷之図」をみると実感できる。

全くの余談ではあるが、この 宇治郷之図」の作者横地長重は伊勢度会人物誌によると、嘉永２年１８４９生まれである。この地図の作成が文久元年１８６１であるということは、若干１２歳で作成したことになり、作成時期に疑問が残る。



（上）三條實美（右大臣）（下）宇治郷之図」現神苑公園に多くの屋敷がある

備前屋に入籍 （28歳） 明治5年

伊勢度会人物誌」では、明治5年に初めて伊勢神宮に参拝し、遂に居を山田に定め、とあるが、 神都名家集」の続きには、

偶々、古市備前屋の主婦松女と会見す。松女、怜悧固より人を視るの明あり。氏の 一挙 一動、好く其節に当り言 々句 々皆聞くに足るを以て大に其機智に服し、欽慕措かず家に恰も嗣子無きを以て其家を継がん事を請ふ。氏、之を退くるに忍びず、他日を約して去る。後、再び来て松女に会す。松女前約を履行せん事を迫り、強いて家に止め、終に前言の如く嗣子たらしむ。時に明治5年6月12日なり。

2回目の明治天皇伊勢神宮参拝について、最新伊勢市史によると、

随行員は（5月）23日に品川を発艦し、25日に鳥羽湾に入港した。龍驤艦から第二丁卯艦に乗り換えて大湊へ向かい、さらに端艇に乗り換えて勢田川に入った。当時神田久志本村であった二軒茶屋に上陸、

とあるので、明治天皇の2回目の伊勢神宮参拝は明治5年5月26日だった。

従って、明治5年6月12日というのは、天皇の2度目の伊勢神宮参拝の段取りをするという三条実美の用向きが無事完了し、匡 一の大役も 一区切り付いたのではないかと思われる。従って、 伊勢度会人物誌の明治5年」は、匡 一が伊勢神宮を初めて参拝した時ではなく、太田家に養嗣に入った時であったと考えられる。伊勢に

はその2年前から居住していた。古市の三大妓楼の一つ、備前屋（太田家）」の主人、松に見込まれた国一は明治5年6月12日と思われるが、同家主人松の娘？ぐに」を娶り、家督を継いで、太田小三郎と改名した。

古市は、江戸の吉原、京都の島原、大坂の新町、長崎の丸山とともに五大遊廓の一つに数えられた遊里であった。特に、備前屋は牛車楼・桜花楼とも呼ばれ、歌舞伎伊勢音頭恋寝刃の舞台となった油屋」、菊寿楼こと杉本屋」とともに、古市三大遊郭の一つであった。天明1781～寛政1800年間の頃に古市は絶頂期を迎え、妓楼約70軒遊女一千人、街巷ちまた（＝待合のことか？）は約342軒あったという。その中でも備前屋は寛政6年1794より伊勢音頭をいち早く呼び物にし、せり上げ式舞台」を考案し、大いに繁栄を極めていた。

せり上げ式舞台」というのは、広い廊下に朱塗りの手すりがせり上がってきて、朱塗りのぼんぼりと共に舞台が出来上がると、右と左から30人くらいの遊女がお揃いの衣装に身をかため、芸妓の囃子にのって、手振りよろしく踊りながら行き違ううちに、お客が今夜の相方を決めるというような仕組みになっている。（古市資料館説明文より抜粋）

幕末には ええじゃないか」が発生して一時的な賑わいはあったものの、古市は明治初年頃には妓楼が32軒、遊女640人くらいに半減衰退（伊勢古市こぼれ話 井村かね）していて、備前屋もそれに漏れず苦しい経営をしていて、負債は山積していたという。その一因として、明治政府により、伊勢神宮が天皇の神社であることを明示され、一般の参拝が憚れるようになり、参拝客が減少したのではないかと推測しているが？

（上）備前屋 （下）好評を博した伊勢音頭のせり上がり舞台

また、神都名家集には、太田家に入籍後、　氏、情々、地方の状況を査察し」とある。また、勢伊志紀顔見評判記には、　家にとてあらず、小吏となりて各地を遊び、」とあるので、太田家入籍直後には家政にあまり加担していなかったと思われ、昔の経験などを生かして、大阪上等裁判所に奉職したり、東京にて川崎正蔵（神戸川崎財閥の創設者、川崎造船所創業者）と共に築地造船所の創立に従事していた。明治5〜9年28〜32歳の頃だったか？

この頃の日本の出来事としては、

明治06年第　一国立銀行（民間銀行）日本初の株式会社、太陰暦を太陽暦に変更
明治08年神宮にガス灯灯る
明治09年度会県が廃止され、三重県に統合
明治10年西南戦争
明治11年神宮暦頒布開始
明治12年宮川の渡し廃止宮川橋再建、コレラ大流行（明治19年にも再流行）
明治13年明治天皇伊勢神宮参拝（3回目）龍大夫邸に宿泊
明治14年国会開設の勅諭　自由党結成など全国的な民権運動の活発化

このような社会情勢の変化や新しい社会への対応の機運が高まっていたに違いない。

学習討論の結社　交修社」創設　（32歳）明治9年

神都名家集に記述されているように、この頃、伊勢に落ち着いた小三郎は、備前屋の家政挽回を図るためにも、伊勢神宮を崇高にするためにも、伊勢の地の繁栄を図らなければならないと考え、まず有志を勧誘して、政治・法律・経済・宗教・教育・及び農工商全般の新刊著書を購入して閲読研究するため、県下初の学習討論の結社を創設した。

その他の発企者は、

北川矩一（くいち）（宇治山田市初代市長、衆議院議員、山田銀行・参宮鉄道の創立に関わる）、
村井恒蔵（米商、町会議員・初代町長、市・県会議員・県会議長、山田銀行・伊勢電気会社・五二会創立に尽力）、
山本伊兵衛（木綿商、町・市会議員、三重県製茶会社副社長、山田米穀取引所専務理事、山田銀行）、
野村四郎兵衛（材木商、茶問屋、町・市会議員、山田銀行取締役、北海道移民会社、伊勢物産会社）、
島田長兵衛（呉服商、町・市会議員、山田銀行頭取）、
吉川清三郎（機業、志勢同盟会）

など、伊勢財界の重鎮たちであり、この頃には小三郎は彼らの信認を十分得ていたものと思われる。この結社は特に「神宮」に関して提案などを行い、神苑会創設の遠因となったし、明治14年、政治結社　志勢同盟会」発足に発展した。

この活動は途中、中断することもあったけれど、明治38年、日露戦役記念事業として交修社所蔵の図書962冊を寄贈して 交修社図書館」が開館した。

北川矩一

村井恒蔵

野村四郎兵衛

太田光熙（10歳？）を迎える　（小三郎40歳） 明治17年頃か？

記録は全く無いので邪推に過ぎないけれど、経済的に一息ついたところで、子がなかった小三郎は家業の継承に考え、この頃、養嗣 光凞」を迎えたのではないだろうか？

太田光凞みつひろは、明治7年に山口県で誕生している。のちに、京阪電気鉄道社長、会長や父、小三郎が創立した宮川電気の後進、伊勢電気鉄道の社長などを務めた。

光凞の父親は、長州藩の豪商、白石家の三男で、長州藩の大年寄大庭家に養嗣に入った大庭景明（小三郎より14歳年上）である。幕末、お互いの兄、鷹羽浄典も、白石正一郎も、また、それぞれも勤王の志士であったし、維新後は大庭景明も同じように太政官に出仕していて、前述のように、小三郎は三条実美の 徴士」となっていることから二人は古くから深い親交があったに違いない。

中部電気協会中部支部機関誌 中部のエレルギーを築いた人々 京阪電鉄の事業を基礎に、大同電力副社長、合同電気社長など電気事業経営に関わった太田光凞」などによると、光凞は太田景明の四男として生まれたとある。従って、大庭家累代の墓のHPによる、その大庭伝七こと景明には、長男 景一（陸軍少佐）、次男 景陽（維新史料編纂所）、三男 景秋こと柯公（ロシア通のジャーナリスト）の3人の子がいて、との記述はあるけれど、三男の景秋は明治5年生まれであるので、明治7年生まれの光凞が四男だったことが裏付けられる。しかし、養嗣に出てしまったので大庭家の中では、兄弟の人数に入っていないのだろう。幼名はきっと 景」の字があったに違いないけれど、太田家に入籍し、 太田光凞」と改名したのであろう。

しからば、光凞が何時頃、太田家に入籍したかについては全く不明であるけれど、その後の著書 電鉄生活三十年」で大学時代を振り返っている中に、

当時、父の友人で大学の保証人でもあった渡邊洪基（神苑会初代副会頭、東京府知事、東大初代総長、
建築学会などの会長）に相談する

とあることから、遅くとも大学入学時には小三郎を頼りにしている（親子関係）。さらに、大学入学にはそれなりの学習時間が必要であったに違いないので、備前屋の財力が頼りであっただろう。明治5年太政官発布学制では、小学校下等科4年制で6～10歳が就学、その後、小学校上等科4年制は10～14歳、中等学校下等科3年制14～17歳、中等学校上等科3年制17～20歳、大学校入学は20歳頃であった。大学卒業の明治31年の時、光凞は24歳だったので大体の年勘定が合う。

さらに、実母は明治11年（光凞4歳時）、実父大庭景明は同18年（11歳時）に54歳で没しているので、この約束事はそれ以前に行われたと考えるのが順当だ。

このようなことを考慮して、光凞が太田家に入籍するのは、子がなかった小三郎は、家勢が挽回して経済的に一息ついたところで、家業の継承を考え、「光凞」を養嗣に迎えたのは、年は10歳頃の明治17年前後ではなかろうか？

太田光熙の経歴は以下の通りである。

明治07年　山口県生れ

小三郎の同胞、下関の豪商・勤王志士であった白石正一郎の末弟は大庭家の養嗣、景明となり尊皇攘夷運動に身を投じたが、「光熙」はその男子だった。

明治31年　東京帝大法科卒業後、鉄道省入省

明治39年　京阪電気鉄道設立時の専務取締役（のち会長）渡辺嘉一（日本土木史の父、参宮鉄道の経営にも参画）が鉄道省の人材斡旋を依頼

明治40年（33歳）小三郎に相談せずに自らの意志で、京阪電気鉄道入社。庶務課長として開業に尽力

明治43年　京阪電気鉄道取締役就任

明治44年　京阪電気鉄道常務取締役

大正05年　（小三郎逝去）

大正07年　伊勢電気鉄道社長就任

大正08年　京阪電気鉄道が設立に参加した大同電力（初代社長福澤桃介）常務取締役就任

大正13年　伊勢電気鉄道改め三重合同電気社長就任

大正14年　京阪電気鉄道社長就任

昭和03年～同06年　大同電力代表取締役副社長に昇格。のち～同14年取締役

昭和05年　（三重合同電気が合同電気に改称）

昭和11年　京阪電気鉄道会長就任

昭和12年　合同電気が東邦電力に合併し、東邦電力副社長に就任。

昭和14年　京阪電気鉄道相談役に就任したが、食道癌のため死去。享年65歳。

太田光熙

備前屋の家勢挽回　（４１歳）明治１８年頃か？

備前屋の再生を託された小三郎は、これまでの経歴を充分活かし、学んだ私塾「咸宜園」の所在地でもあり、英彦山も管轄していたことのある日田（ひた）県令松方正義（明治２４年第４代・明治２９年第６代総理大臣）公の

知遇を受ける等により、小三郎は１０余年で負債は挽回したという。しかし、松方公からどのような知遇を受けたのかについては、現在の所、その記録を見い出すことはできてはいない。

また、備前屋の家勢挽回は何時頃実現したのであろうか？記録はないけれど、備前屋に入籍したのが明治５年、その後、裁判所や造船所に勤務しているので、備前屋の立て直しを開始したのは明治８年（３１歳）頃だと推定すると、それから１０年後は明治１８年（４１歳）前後になるのではないだろうか？。

松方正義

製紙兼活版印刷業　殖産組」創業　（４１歳）明治１８年

明治４年御師が廃絶され、明治１１年より神宮暦が頒布開始されるにあたって、お祓い大麻（神宮の御札）を

神宮で製作することになり、製紙・印刷の需要が増加するという環境もあり、備前屋の家政も 一段落付きつつあったと思われる中で、

村井恒蔵（38歳） 前述
野村四郎兵衛（32歳） 前述
浜田種助（51歳） 赤福 初代町会議員
島田長兵衛（29歳） 前述
石丸弘人 初代町会議員
吉川清三郎（53歳）

らと共に、製紙を目的として「殖産組」を創業した。その後、活版印刷業の「精心舎」の事業を引き受けて、製紙及び活版印刷業を行った。（宇治山田市史） しかしながら、同時期の明治19年、中北喜平（のち神都製紙社長）が製紙業を創業するなど同業も多かった。明治32年、中北喜平、小林直助、木下喜助、山本斎吉、里和助次郎、青木伊平らが「伊勢産紙」を組織して、製紙業者が乱立したため、明治32年、「殖産組」・「伊勢産紙」・「五十鈴川製紙」3社が合併し、「神都製紙」設立された。その結果、各社の品質のばらつきが解消され、神宮の用紙を引き受ける体制ができるようなった。その後の「殖産組」は活版印刷業に専業することとなり、昭和25年の電話帳にも記録がある程に継続した。

敬神団体 「神苑会」結成 （42歳） 明治19年

神苑会は敬神団体として、大岩芳逸、村井恒蔵らとともに発起し、創立趣意書作成と会名称命名は満岡勇之助（教師 度会郡長）が当った。

大岩芳逸（ほういつ）（27歳） 医師、明治31年町会議員、十七日会（敬神団体）を明治9年組織し、神都の公益に尽力したが、神宮の清浄を保全し、煤煙問題を回避するために宇治への鉄道入線を阻止するようなことも行った。その結果、現在でも宇治には鉄道が入線していない。

村井恒蔵（28歳）米商、町会議員・初代町長、市・県会議長、山田銀行、山田米 油会社、伊勢電気会社、五二会創立に尽力

前述のように、神苑会の発足は小三郎の熱意抜きでは考えられないけれど、彼 一人の発案だっただろうか？
その後ろ盾だった三条実美の、また、三条家の悲願があったに違いないと考えられる。そのことで、神苑会の運営は早期に全国組織として順調な活動ができ、皇族を始めとする盤石な協力が得られたのだと考えられる。
ただ、発足当初は交修社活動に参加した地元の財界人を中心した活動であった。その会員数は82名で、一志

久保町の旅館　吸霞園に仮事務所を設置し、４部体制で事業に取り組み始め、早速、神苑整備計画などの立案を開始した。メンバーは年齢的には若く、その頃の地元経済界自体のエネルギーが感じられる。

発足当初の体制

仮会頭

浦田長民ちょうみん（度会郡長、度会府官吏、神宮少宮司）

　神宮改革で中心的な役割りを果たした

庶務部

太田小三郎

大岩芳逸

吉田轍五郎（初代町会議員）

山本伊兵衛（茶業）、

宇仁田宗馨そうけい（山田羽書取締役、度会県会計課長、禰宜）

土木部

濱田種助（赤福）

井坂徳三郎（度量衡販売　県会議員）

澤潟おもがた久信、

西川武右衛門（初代町会議員）、大西六郎兵衛

文書部

石丸弘人（初代町会議員）

小森梅太郎（林業）、

白井清栄門（旅館油屋主人）

藤井清司

吉川清三郎（宮川分水工事を企画）

主計部

橋爪孫七（公益）

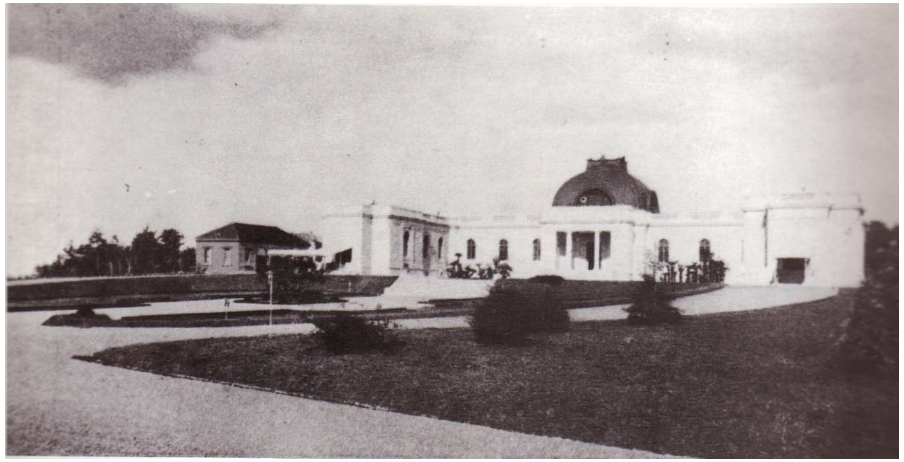
上野梧一

島田長兵衛（呉服商）、

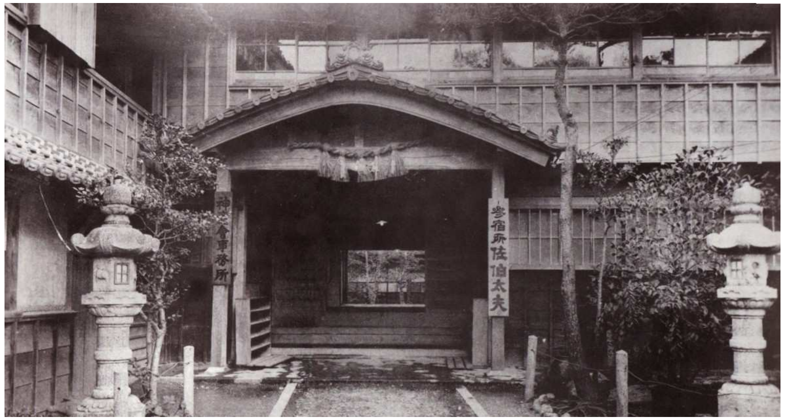
世古善兵衛（青物市場）

野村四郎兵衛（茶業）

（写真）初期の徴古館



神苑会の初期の頃を含め、その事務所は点々と移動していて苦労が忍ばれる。
(上)佐伯旅館春風荘に(下)外宮前　農業館（明治２４年建築）にも



農業館

神苑会の業績(1)　「賓日館」建設着工　（４２歳）　明治１９年

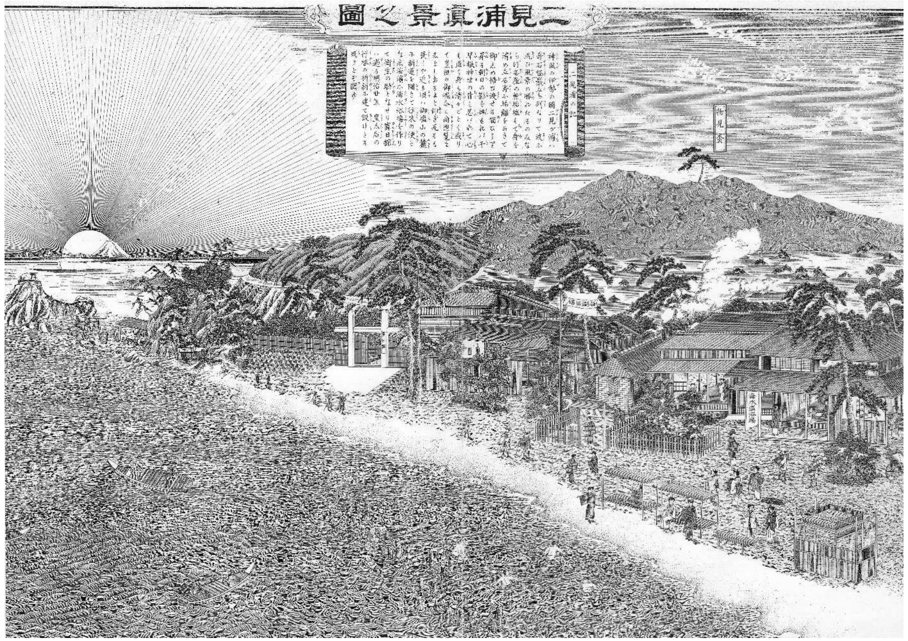
明治天皇の母、英照皇太后の宿泊のため、明治１９年１２月に着工し、翌２０年２月に、たった2ヶ月の突貫工事で竣工した。その時の建設委員は、島田政充、秋田喜助であった（神苑会史料）。会は発足直後であり、募金を始める前で資金が無かったため、役員 一同の保証で建設資金を調達し、完成にこぎ着けた。

この時の建設委員に何故、この二人が選出されたのかは不明だが、島田政充は主計部員の 一人の島田長兵衛の諱である。そして、明治２０年の役員名簿でみられるように、同じく主計部員だった秋田喜助とは姻戚関係にあったこと、過去からの業績からも、お互いに信頼関係が充分にあったことから選出されたように考えている。

島田政充こと、島田長兵衛は 一志久保町の島長呉服店の養嗣となり、明治１８年家督を相続した。将来、洋品の流行を見通して、店舗を洋風に改め、洋品の販売を行うなど、商才に恵まれていた。一方、同志と図って、明治２７年、㈱山田銀行（後述）を設立し、頭取となった。同３９年市会議員に選ばれ、市政にも参与している。賓日館建設着工時は３４歳だった。

一方、私の曽祖父、秋田喜助についても「伊勢度会人物誌」を引用し、家系を辿ると、賓日館建設着工時では27歳だった。幼名は熊吉で、5代目喜助を若くして襲名、家督を相続した。代々、呉服商を営んでいたが、前述の島田長兵衛は8歳年上の義兄であるので、その影響を強く受けていたに違いない。時勢を感じ、明治20年に洋物商に転業し、その結果、家政は繁栄した。商売に励むと同時に公共心に富んでいたため、長兵衛に勧められたのであろう、神苑会発足直後に神苑会へ入会したように思う。しかしながら、賓日館建設の実績が小三郎に認められたのか、その後、小三郎とは15歳の年齢差がありながら、協力して(多分、部下となって)、宮川電気株式会社を創立し、同社の社長を任されるなどの関係を作っていく。

賓日館の完成後は有栖川熾仁たるひと親王が鳥羽港より賓日館に到着。その後、両宮を参拝した。その翌月、明治天皇の母、英照皇太后が初めて宿泊された。同地二見浦ふたみがうらは明治15年に日本初の海水浴場として発足していて、その後、大正天皇も同館に宿泊され海水浴を楽しまれたことなどもあり、同館は伊勢神宮に参拝する賓客の休憩・宿泊ための施設として機能したが、神苑会が解散した明治44年、隣地の旅館二見館に払い下げられ、別館として平成11年まで営業、平成15年2003二見町に寄贈されている。



(上)二見浦真景之図(海水温浴場や賓日館がある) (下)現在の賓日館

明治20年神苑会役員名簿と役員略歴　（43歳）　明治20年

簡略に列挙するが、この頃の神苑会は組織的には大きくはなってきているが、まだまだ地元の有力者が中心となっていることに変わりはない。（神苑会史料より抜粋）

また、この時の伊勢の地場産業としては、茶業、製紙業、米穀業、漆器業などの製造業があり、旅館業、卸業、小売業、医師などの多種多様な地場産業が集合して、鉄道、銀行、電力などの新しい産業を創造しようとしていたことが垣間見える。

仮頭

鹿島則文（鹿島神宮宮司、のち伊勢神宮大宮司、皇學館の創立などに尽力）

幹事兼庶務部長

太田小三郎（42歳古市備前屋主人、明治31年町会議員、参宮鉄道・山田銀行などを発起）

庶務部員

山本伊兵衛（初代町会議員、三重製茶会社・山田米穀取引所・山田銀行を創立）

岩芳逸（医師、明治31年町会議員、十七日会を組織、神都の公益に尽力）

吉川清三郎骨董商、志勢同盟会、殖産組、山田製紙会社、宮川分水工事を企画）

村田徳三務（伊勢河崎　角仙商店（現在の角仙合同株式会社）村田家八代当主）

山中崔十（眼科医）

村井恒蔵（米商、町会議員、初代町長、市・県会議長、山田銀行・山田米油・伊勢電気会社、五二会創立に尽力）

石丸弘人（初代町会議員）

白井清栄門（古市旅館油屋主人、初代町会議員、山田銀行、宇治山田町立病院設立に尽力、参宮鉄道社長代理）

西川武右衛門（初代町会議員）

辻村弥八（初代町会議員　金物商）

久保田五兵衛（漆器商、明治31年町会議員）

岡村長四郎（漆器（伊勢春慶）の製造販売）　ほか5名

書記　3名

寄付金募集係　2名

主計部長兼庶務部員

宇仁田宗馨（度会県会計課長、参宮鉄道取締役、宮川電気取締役）

主計部員

竹内善兵衛（呉服商）

山羽九郎兵衛(青物問屋、第1回半数改選町議会議員)
世古善兵衛(初代町会議員、商業会議所議員　青物市場)
島田長兵衛(呉服・洋品商　初代町会議員、山田銀行初代頭取)
世古口喜平次(南勢志摩郵便局長協議会長)
小川宗一(酒問屋、参宮鉄道に尽力)
秋田喜助(28歳　洋物商、初代町会議員、宮川電気初代社長)
榎本三右衛門(砂糖商、商工会議所議員)
西田七左衛門(酒問屋(神都麦酒)、初代町会議員)
橋爪孫七(明治31年町会議員)
河村清兵衛(糀屋　醤油製造業)
山下五郎兵衛(伊勢河崎　山下五郎兵衛(山五)商店　カツオ節製造販売)
橋本総(惣)八(製油業)

地所家屋調査委員
佐田齋次郎(初代町会議員)
中西用亮(外宮禰宜、教育に尽力、貸金業)ほか1名

町委員　38名

この名簿でみられるように、これらの役員はその頃の地元経済界を担っていた者が多く、明治22年　宇治町と山田町が合併し宇治山田町となった時に第　一回宇治山田町　々会議員選挙が行われ、町会議員になっている。その後、明治28年に半数改選、明治31年には、さらにその半数の改選が行われたが、明治31年に小三郎は町会議員に当選している。

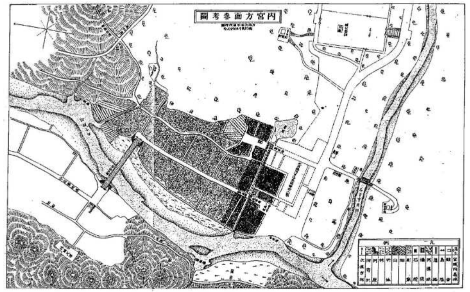
神苑会の業績(2)「神苑整備」(43~60歳)明治20~37年

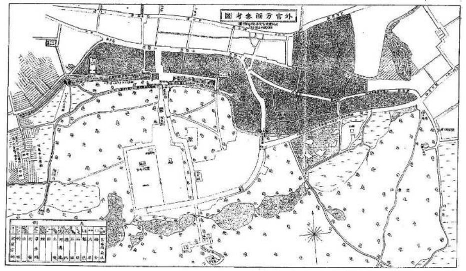
明治20年、三条家の、あるいは小三郎の悲願だった　神苑整備」にやっと着手できた。

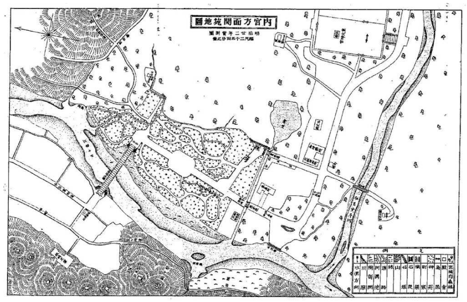
3年を要し、内宮宇治橋内民家56戸を撤去。山林170町歩を神宮風致保存林に編入し、明治27年神宮に献納した。この時、正殿四重垣、内宮東西の宝殿が正殿の後ろに後退した構造が確立した。

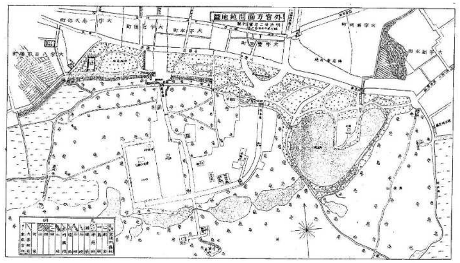
外宮では、北御門　口より東方の岡本町西端から西方の藤社までの間の民家127戸を撤去。苑地と民家の間に幅7間の道路開通させ、明治22年の遷宮時に勾玉池を造成した。デザインは造園家　小沢圭次郎が行った。北御門前の旅館の立ち退きと神苑整備が完了するのは明治37年頃だった。

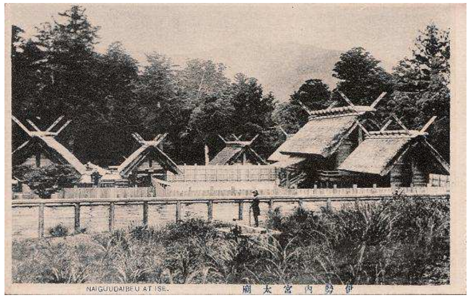
1列目(上)内宮神苑の整備前後(下)正殿構造の新旧
2列め(上)外宮着工前の神苑と整備後(下)北御門前の旅館　神風館と宇仁館











これらの工事によって立ち退きを迫られた住民に苦労は測り知れないけれど、この工事によって観光資源として現在の価値が生まれたことも忘れてはならない。

神苑会が全国組織に （45歳） 明治22

発足当初は宇治山田に拠点を置いて三重県内の有志から寄付金を募るとともに東京にも事務所を置いて募金活動を進め事業を遂行する予定であったが、三重県という一地方の組織では事業計画が大き過ぎて遂行が困難であるとの認識から、明治22年からは全国的組織に改めて、総裁を有栖川宮熾仁親王に、会頭を宮内省次官の吉井友実に委嘱して国家的規模の事業として展開された。また、事業計画の見直しがなされ、農業館と徴古館などの設立が進められることになった。(最新伊勢市史)

との記載があるが、地元を組織できた小三郎の功績は大きいけれど、三条実美の存在を考えると、全国組織になるべくしてなったのではないだろうか？

最終的には、徴古館前にある神苑会碑の裏面に刻印されているように、神苑会の解散時の明治44年時は日本を代表する人たちで構成され、全国的な運動となった。

総　裁　有栖川宮熾仁たるひと親王（明治22年就任）

有栖川宮威仁たけひと親王（明治就任28年）

会　頭　吉井友美　宮内次官　日本鉄道社長

花房義質よしもと（明治24年就任）従二位勲一等子爵外交官、日赤社長

副会頭　渡辺洪基ひろもと（明治22年就任）

周布すふ公平（明治30年就任）正三位勲一等男爵、貴族院議員

理　事　小松原英太郎　従三位勲二等、大臣　拓大学長

田中芳男　男爵　従三位勲一等、博物学者

桑原芳樹　従四位勲五等、熱田神宮宮司

満岡勇之助　神苑会の名付け親

太田小三郎

土方久元　政治家　宮内大臣

有田義資よしすけ　三重県知事

斯波淳太郎

水野錬太郎　大臣

三室戸和光まさみつ　公家

山崎直胤なおたね　三重県知事

安江　孝　正六位勲五等

木野戸勝隆　従五位勲六等、神宮宮司、皇學館館長

監　事　馬場三郎　従四位勲三等、実業家、貴族院議員

渋沢栄一　男爵、従三位勲二等、実業家

大谷嘉兵衛　勲三等、実業家、貴族院議員

参宮鉄道（株）」設立　（45歳）　明治22年

明治22年　日本で初めての経済恐慌を経験し、財界は不振を極めていた情勢の中、全国組織となった神苑会は新しい会頭、吉井友実ともざね（伯爵、宮内次官、日本鉄道社長などを歴任）を迎えた。吉井は日本鉄道社長でもあったことから、その提案があったに違いないと思われるが、太田小三郎を初め、初代宇治山田市長であった北川矩一や宇仁田宗馨、上野悟一、北川宗一、西田七左衛門、小林久次郎、竹内善壽、井阪徳三郎らが発起人となり、さらに渋沢栄一（神苑会監事）、大倉喜八郎、渡辺洪基（神苑会初代副会頭、東京府知事、東大初代総長、建築学会などの会長歴任。養嗣光凞の大学の保証人でもあった）、奈良原繁らの大物を加えて、伊勢神宮の参拝客を見込んで、

津・小俣間の鉄道建設を出願し、神苑会の幹事だった太田小三郎が参宮鉄道㈱設立の仮免許を取得した。その後の経緯は以下の通りである。

明治23年　将来、関西鉄道（現在の関西本線・草津線などを建設）と連絡することを条件として免許が下りた。

明治24年　亀山〜一身田開通

明治26年　津〜相可（現在の多気）〜宮川間が開業。参宮線終着駅として開業した宮川駅は降者数が松阪駅の約2倍で大変、混雑したという

明治27年　宮川駅〜山田駅（現、伊勢市駅）間の延長を申請

明治29年　申請区間の免許が下される

明治30年　4年の長き時間が要して、宮川〜山田（現在の伊勢市）間が開業。山田駅の開業によって、宮川駅の降者数は以前ので約10分の1に激減したという

明治37年頃　山田〜宇治〜二見〜鳥羽間の延長を申請

明治40年　申請区間の免許が下りるが着工に至らなかった

鉄道国有法公布により国有化され鳥羽への延長は山田駅から直接二見に至るように変更された

明治42年　亀山〜山田間の線路名称が　参宮線」と制定された

明治44年　山田〜鳥羽間が国鉄線として開業し全線開通した

大正05年　筋向橋駅を山田上口駅に改称

現在の駅は、田丸（明治26年開業）〜宮川（明治26年）〜山田上口（旧、筋向橋明治30年）〜伊勢市（旧、山田明治30年）〜五十鈴ケ丘（昭和38年）〜二見浦（明治44年、景勝地はふたみがうら、駅名はふたみのうら）〜松下（昭和38年）〜池の浦シーサイド（平成元年）〜鳥羽（明治44年）である。

この間の人事については資料を見い出せていはいないが、小三郎が参宮鉄道社長であった頃、技師長を経て、同社の社長・会長となった渡邊嘉　一がいた。その後、1906年に設立された京阪電気鉄道の専務取締役なっていたが、小三郎の養嗣　光凞を京阪電気鉄道に勧誘した。

（上）吉井友実　（下）北川矩　一

（上）明治２６年頃の宮川駅　（下）同４２年頃の山田駅

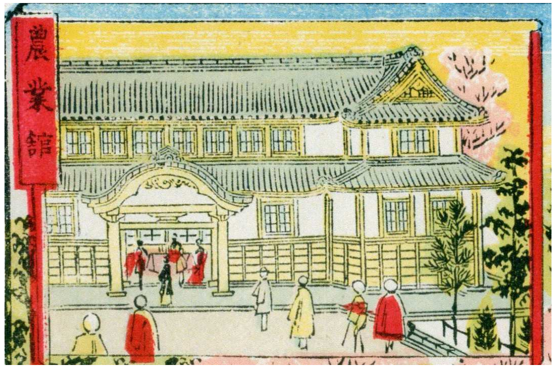
神苑会の業績（３）

神宮農業館」外宮前に建設

（４６歳）明治２４年

博物学者で貴族院議員の田中芳男が建築委員長となって、当初、外宮 一の鳥居前に、床面積１００坪の平屋・瓦葺で、館内を農作・種樹・漁労・牧畜・養蚕の５部に分け、さらに２４類に細分し、各種産物・製品・器具・機械・標本・模型・図書・統計を展覧した。さらに西隣には津市の公園内にあった三重県物産陳列所を移設し、工業館として増設。工芸品１６種１６００余点を展覧した。

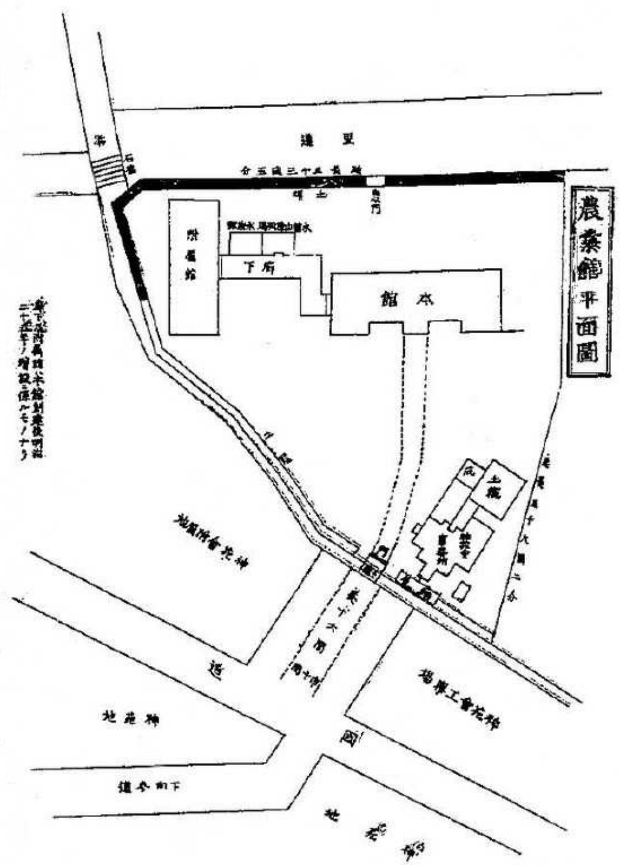
その後、倉田山が整備されることに従って、明治３８年に移築されるとともに大部分を新築されて規模も拡大された。その設計は徴古館と同じく、赤坂離宮（現在の迎賓館）や東京・奈良の国立博物館を手がけた宮廷建築の第一人者片山東熊である。



（写真上）外宮前の農業館

（下）現在の勾玉池

外宮前の農業館の配置図と外観



「山田銀行(株)」開業　（４９歳）明治２７年

山田銀行は、当時の宇治山田の経済界を代表する北川矩一、野村四郎兵衛、島田長兵衛、西田七左衛門、北川治郎兵衛、濱田種助らによって発起され、明治２７年に認可され、開業した。資本金六万円、頭取に島田長兵衛、取締役　北川矩一、西田七左衛門、野村四郎兵衛、太田小三郎で、店舗は宮後に置かれた。

明治２８年　開業後は順調に発展し、貯蓄銀行を兼業した。貯蓄銀行は、明治２３年の条例によって、零細な貯金を吸収する金融機関として認められたものであるが、一般的には、特定の普通銀行の資金吸収機関となるものが多かった。

明治２９年　鳥羽支店を開業

明治３０年　波切支店を開業し、宮後１５番地に本店を新築した。

明治３３年　開業した山田商業銀行を同年に合併した。

明治３４年　明治３０年前後の日清戦争の反動不況が回復しきれていなかったところに、明治３３年初頭、北清事変が勃発し、わが国の対清輸出が大打撃を受け、株価は大暴落し、全国に取り付け騒ぎが広がった。他銀行と同様に山田銀行でも一時、休業に至ったこともあったが再開した。(伊勢市史)

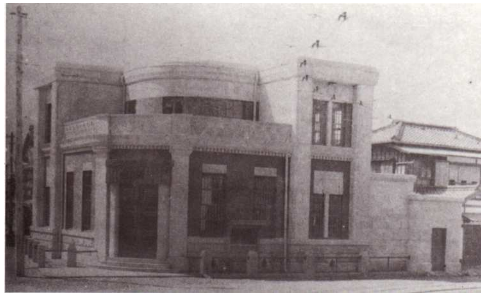
しかし、その後も日清戦争と度重なる対外拡張政策などにより外債の発行が続き、日本の対外債務は膨張したため、明治38年から大正3年にかけての時期は不況となり、明治維新以来の経済体制は崩壊の危機に瀕した。その結果として、銀行の再編が必須となった。

明治42年　明治33年に開業した三重銀行と合併し、頭取に太田小三郎が着任。

大正07年　四日市銀行へ併合された。

その頃にあった銀行

上から、山田貯蓄銀行（八日市場）、勢南銀行（八日市場）、不動貯蓄銀行（明42岩淵町→大6豊川町）、百五銀行山田支店（明12出張所→大7現在地）



宮川電気(株)」創業

（51歳）明治29年

電灯が日本で初めて紹介されたのは明治11年で、電気事業は19年の東京電灯に始まり、東海地方では23年、名古屋電灯が開業した。三重県では、30年4月に津電灯が、6月に宮川電気、9月に四日市電灯が電灯事業を開始した。

明治20年　太田小三郎らによる電灯会社設立の企画があったが中断。

明治26年　名古屋電灯会社から電灯会社設立の働きかけがあったが実現せず。

明治28年　京都電気鉄道開業。

太田小三郎、秋田喜助らにより電灯会社設立が企画されたが、一方で、大阪の岡橋治助(奈良出身大阪第三十四国立銀行初代頭取)、平川靖、片岡直温(衆議院議員　日本生命副社長)、らの企画があり、同年秋から両者の調整が行われた。（最新伊勢市史）

発起人13名によって、宮川電気株式会社は設立した。

役員は大阪と地元のバランスがとられた。社長に平川靖（大阪）、取締役に秋田喜助（専務）、太田小三郎、山口善五郎（大阪三十四銀行）、村井恒蔵、監査役には弘世助三郎、泉　清助らが就任した。（滋賀大学経済学研究年報VOL．10）

明治２９年　宮川電気㈱設立。その目的は、宮川の水力を利用して発電し、電灯・電車・工業に供給することであった。可能性がある。拙家に伝わる写真で、水力発電所建設のための宮川視察時に撮影されたものか？上の写真には小三郎が写っている可能性がある。下は、私の曽祖父秋田喜助だと思われる。

しかし、この時には水力発電と山田二見間の電気鉄道は許可を得られなかったので、電灯事業のみを行うこととして、火力発電による営業に切り替え、事業を発足。同年、宮川電気株式会社の創業総会を迎えた。

明治３０年　事務所を岩渕町へ移し、社長に秋田喜助が就任。岩渕第１発電所（現在の中部電力㈱伊勢営業所内）において、１００馬力汽罐（ボイラー）１台、５０キロワット発電機１台を設備し、電灯の営業を開始。燃料の石炭は、勢田川の舟運で岩渕まで運ばれたが、のちには二軒茶屋まで運び、陸揚げ後発電所まで電車で運び込んだ。

この年の電灯の営業状態は、需要家数４５０戸、電灯数１７８６個である。

再び、宇治二見電気鉄道の名義で出願したがまたも却下された。しかし、再度、電気鉄道敷設を決議した。

明治３４年　岩渕町（本町）より二見町大字江村間の軌道起工の認可を得られた。

明治３５年　宮川電気臨時総会にて電鉄兼業計画案を決議し、山田二見間電気鉄道工事着工。

明治３６年　宮川電気を伊勢電気鉄道と改称し、社長に太田小三郎（明治３７年２月の説あり）が就任。

本町～二見間７．６ｋｍを竣工・開通。車両八台で開業した。

山田・二見間の運賃は片道１２銭、午前６時より午後７時まで５８往復を運行した。

明治３７年　電車運転用に岩渕第２発電所（錦水橋下流左岸、直流７０キロワット）を増設した。

明治３８年　山田駅前（後、伊勢市駅前）～本町（岩渕町）間０．３kmを延伸、開業。
明治３９年　電灯の営業状態は、需要家数７０７、電灯数２４３８に増大している。
同年の収入の内訳は、電灯料収入２９．６％、鉄道収入ほか７０．４四％となっている。
内宮行き、古市口～宇治（後、猿田彦神社前）間４．５km開通。
車両を２４台とし本町・猿田彦神社前間及び中山・二軒茶屋間を開業。
外宮・内宮間の開業が遅れた理由については、宮川電気と参宮電鉄（大阪市杉山宗兵衛ら）との競合や道路敷き利用についての宇治山田町の了解の遅れたことが原因であった。
明治４０年　社長：太田小三郎、副社長：秋田喜助、常務：村井恒蔵、取締役：村井忠三郎、五富利金吾（明３４町会議員）、監査役：田口程吉（明治２２年第１回宇治山田町会議員）、竹内善四郎、阿竹嘉六。
（滋賀大学経済学研究年報ｖＯＬ．１０）。
明治４１年　電灯供給地域を二見町に拡張
明治４２年　御幸通りに本町～外宮前～古市口間１１．３km工事着手し開業。この間を事実上、複線化した。
結果として、一般的な路面電車が左側通行なのに対し、伊勢の路面電車は右側通行になった。
明治４３年　電気需要の増大に対応して第２発電所に電灯用発電機（３００kw）を増設。
明治４４年　電灯供給地域を大湊神社両町に拡張。
大正０３年　浦田町（猿田彦神社前）～内宮前間０・９km開業。

大正０５年　社長：太田小三郎、取締役：秋田喜助、浜崎健吉、梅原亀七、河村清兵衛、監査役：阿竹嘉六、高倉藤平、堀田元次郎、支配人：山内覚成。
同年９月５日　コレラにより太田小三郎没。
大正０７年　太田光熙みつひろ（小三郎嗣子）伊勢電気鉄道社長就任。
大正１１年　電力会社の整理統合により、伊勢電気鉄道は松阪水力電気・津電灯と合併して三重合同電気㈱となる。それに及んで秋田喜助は退職した。
同社に於いてはその多年の功労に酬いるために慰労金若干を以ってし、且つ会社前に胸像（１９２７年　中村武平氏作　屋外彫刻調査保存研究会の調査）を建設して之を表彰した。その胸像は戦時下供出されたと聞いている。（写真）秋田喜助と胸像

大正13年　太田光熙　三重合同電気社長に就任。

昭和03年　大正14年に営業を開始した朝熊登山鉄道を合併、朝熊線として同社路線となる。

昭和05年　社名を合同電気㈱（運輸課）とし、太田光熙が社長に就任。京阪電気鉄道の経営であった和歌山軌道線（昭和15年に阪和電気鉄道傘下の和歌山電気軌道へ譲渡、最後は南海電気鉄道の路線となって昭和46年廃止）を譲り受ける。

昭和12年　東邦電力㈱（運輸課）に合併、同社の津支局の管轄となり太田光熙　副社長に就任（没するまで）

昭和14年　国策によって電力事業と運輸事業を分離することになり、宇治山田市内の軌道線は新たに設立された神都交通の経営となる。太田光熙　没

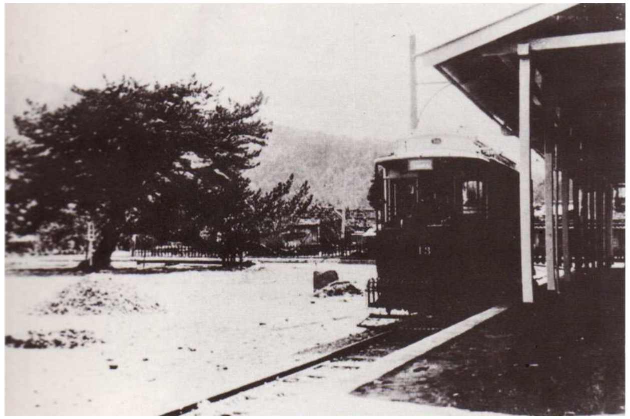
昭和19年　戦時下の不要不急路線として朝熊線を休止、三重県下の鉄道・バス事業を統合して三重交通㈱が発足、同社の路線となる。

昭和34年　伊勢湾台風によって一時不通に。

昭和36年　神都線をバスに転換して全廃。車両は山陽電軌、八王子線、名鉄、豊橋鉄道、松坂線などに売却されたという。

昭和37年　休止中の朝熊線を廃止し、歴史に幕を閉じた。

神都線（廃線記念アルバム）」昭和36年三重交通㈱総務局編集、
「三重交通　神都線の電車」和久田康雄　中野本　一著　等、参照



（上）山田駅前停留所　左、油屋旅館支店　右、宇仁館支店（明治38頃）

（中）藤波の松横の浦田町停留所　ループ折返し（明治40頃）

（下）外宮前停留所（明治42年以降）

電気鉄道の開業順位

鉄道には路面と軌道（線路専用敷地内を走る）の区別がある。
伊勢のチンチン電車の開業順位は、

軌道鉄道としては 全国7番目」
路面電車としては 全国3番目」

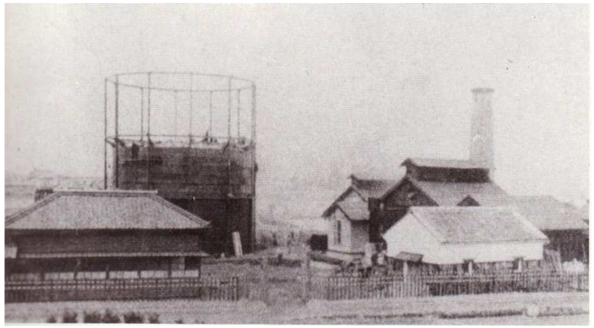
(1位)明治28年京都電気鉄道(①路面京都市電) 伏見線七条停車場－下油掛間
(2位)明治31年名古屋電気鉄道(②路面 名古屋市電) 笹島－県庁前間
(3位)明治32年大師電気鉄道のち京浜電気鉄道(軌道) 川崎－大師間
(4位)明治33年小田原電気鉄道(軌道)国府津－小田原－湯本間
(5位)明治33年豊州ぶしゅう電気鉄道(軌道) 大分町－別府町間
(6位)明治35年江之島電気鉄道(軌道) 藤沢－片瀬間
(7位)明治36年伊勢電気鉄道(③路面) 本町－二見間

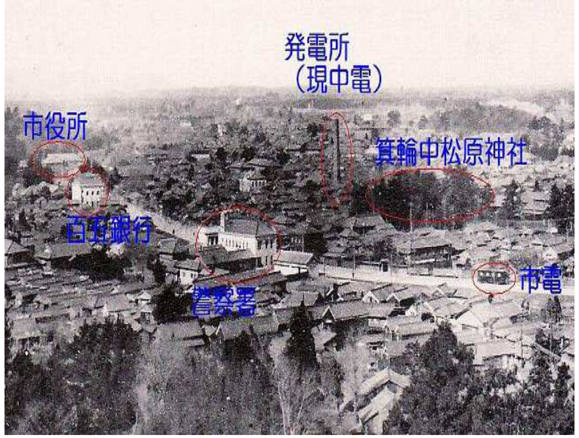
火力発電所は3つあったか？

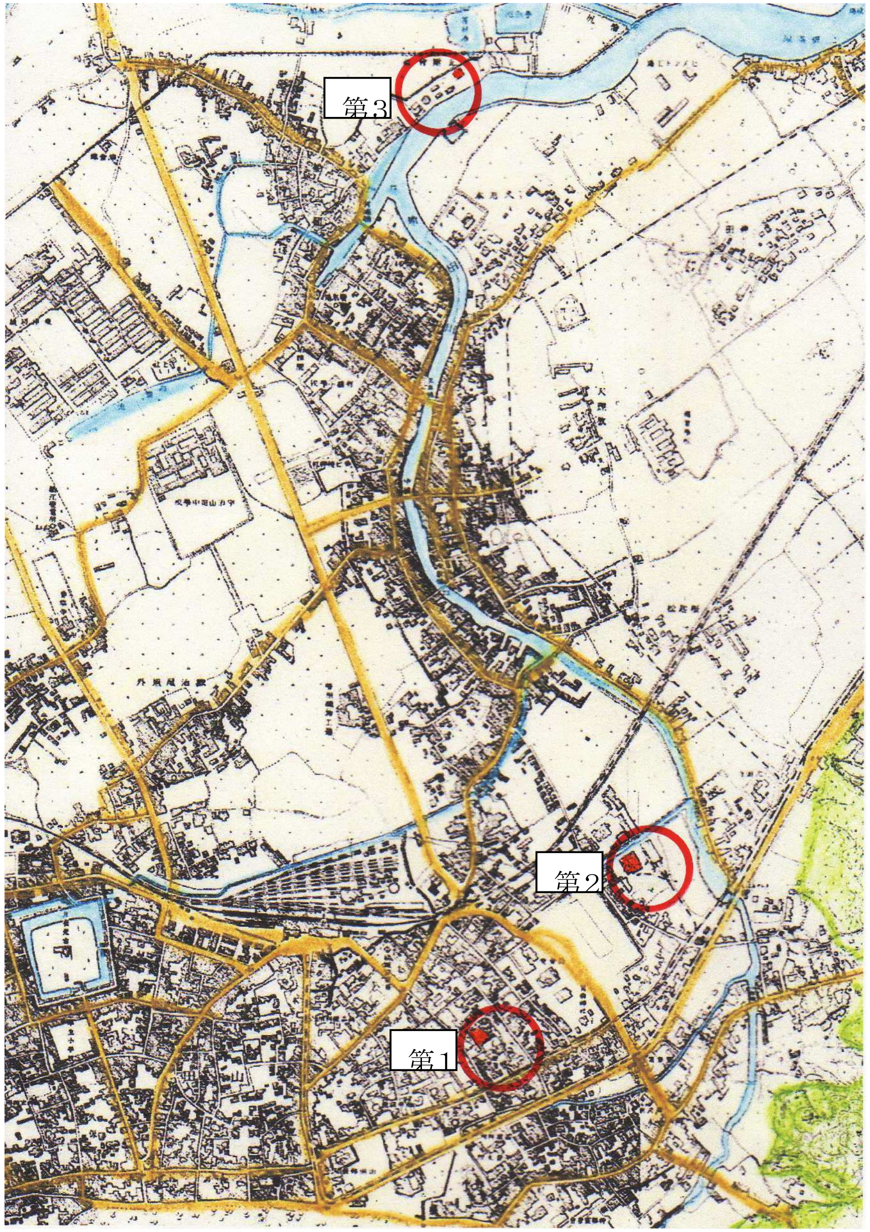
明治30年 現在の中部電力株伊勢営業所内に第1発電所を設置。同43年 錦水橋そばの電車操車場内に第2発電所を設置したことまでは文献から裏付けられているけれど、写真集明治大正昭和伊勢二見小俣」72ページ ガス会社と火力発電所」には、神都ガス㈱(合同ガス㈱)のガスタンクが見える。右は三重合同電気㈱の火力発電所である。勢田川に臨んで船江二丁目にある、との記述とともに写真が掲載されているが、この発電所は本当に「三重合同電気㈱の火力発電所」であろうか？

伊勢市史近代編によると、明治42年、岡山電灯会社専務の岡崎増太郎、名古屋瓦斯支配人・技師長の岡本桜の強い働きかけがあり、明治42年に神都瓦斯㈱(河崎町 濱田國松社長)が設立され、同44年に開業したが、第 一次世界大戦後の石炭価格の暴騰により経営難に陥り、大正6年、急に事業を中止した。しかし、昭和3年に三重合同電気により再開された。その後、効率的な経営のため、社長太田光凞と東邦瓦斯社長岡本桜の間で、三重合同電気が兼営するガス事業を分離し、東邦瓦斯が経営する四日市のガス事業と昭和5年に合併し、合同瓦斯㈱(社長 安保庸三)が設立された。従って、船江の発電所の写真は昭和初期のものではないか。この頃の発電は生産されたガスを燃料として利用し始められていた可能性があるかも知れないし、電力需要が増大していて、三重合同電気としては、第3の発電所を建設しなければならない状況にもあったのではないだろうか？その後、合併を通じて、同社は現在の東邦ガス㈱に至っている。

（上）第３発電所船江（現在、ガスタンクがある場所）、
（中）第１ 宮川電気本社（現中電出張所）、（下）第２錦水橋脇チンチン電車操車場内







神苑会の業績(4)

「神宮撤下御物拝観所」建設 (58歳) 明治36年

明治36年に、同22年の遷宮で撤下された神宝や装束を展示するために「神宮撤下御物拝観所」が建設されたが、同44年に竣工した徴古館が神宮に奉納されたことに伴い、同45年撤下物を移管して閉鎖された。

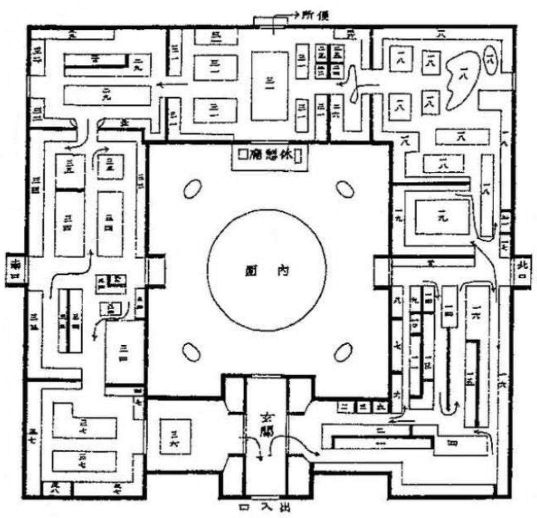
また、古市口より神宮撤下御物拝観所に至るまでの道路工事が開始されたが、「御幸道路」整備の始まりである。(写真上中)神宮撤下御物拝観所(写真下)右上に拝観所、左上が建設中の徴古館と工事中の御幸道路

神苑会の業績(5)

「神宮農業館」倉田山新設 (60歳) 明治38年

倉田山が整備されることに従って、外宮前に建設された農業館は明治38年に倉田山移築されるとともに大部分を新築されて規模も拡大された。その設計は徴古館と同じく、赤坂離宮(現在の迎賓館)や東京・奈良の国立博物館を手がけた宮廷建築の第一人者片山東熊である。当初は現在の神宮美術館がある場所にあったが、美術館建設に伴い、徴古館のそばに移築された。(写真)倉田山に建設された農業館と平面図

農業館平面圖



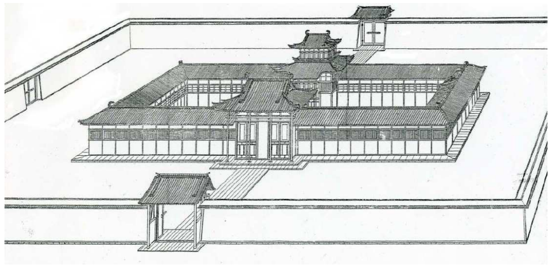
符號

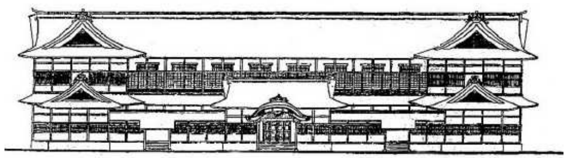
番号	品目	番号	品目
一	穀菽類	二〇	圖譜類
二	菜果類	二一	種子類
三	香辛類	二二	有益植物
四	茶類	二三	有害植物
五	砂糖類	二四	飲食物分析
六	醸造類	二五	土性地質
七	製造食品	二六	肥料類
八	貯蔵食品	二七	農業用具
九	烟草類	二八	農産製貯具
一〇	藥材類	二九	動物類
一一	油蝋類	三〇	動物産物
一二	染料類	三一	[illegible]
一三	纖維類	三二	昆蟲類
一四	製絲類	三三	水産物類
一五	[illegible]	三四	水産漁撈具
一六	[illegible]	三五	水産製貯具
一七	牧草類	三六	神祭具
一八	木材類	三七	[illegible]
一九	竹材類	三八	圖書類

神苑会の業績（6）

神宮徴古館」竣工　（64歳）明治42年

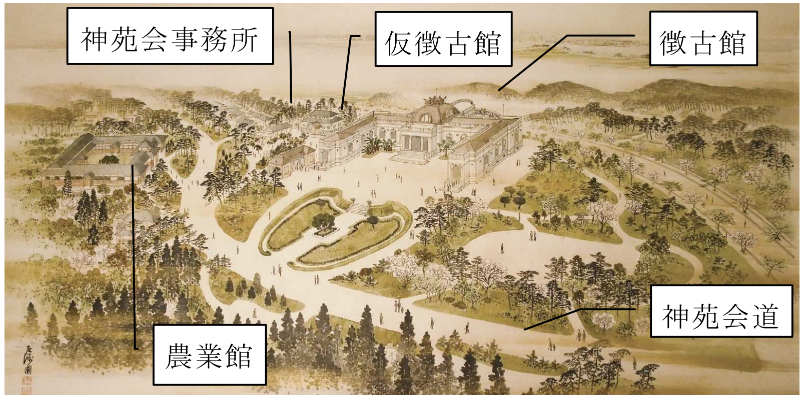
日本初の私立歴史博物館として、農業館を設計した片山東熊が建物を、前庭は宮内省内苑局市川之雄が設計し、明治38年工事を開始し、同42年に竣工。同44年神宮に奉納された。しかし、昭和20年の空襲において大部分を焼失したため、同28年第59回神宮式年遷宮を記念して外壁をそのままに、二階建に改装復旧し現在に至っている。（上）計画当初案1　（中）同案2　（下）賓日館に仮徴古館があったこともある

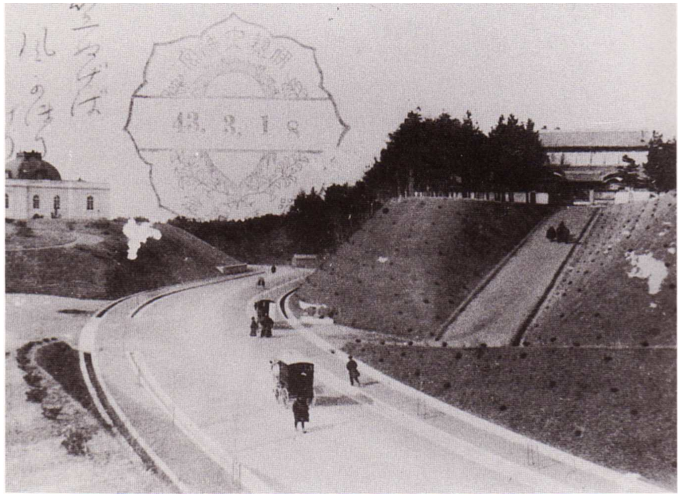




（上）明治27年仮徴古館　（中）倉田山で明治42年竣工された徴古館　（下）現在

（上）倉田山公園鳥瞰図　中村左洲画（中）建築中の徴古館（下）完成後の御幸道路
倉田山公園の整備計画案では、動物園、植物園、水族館、競馬場もあったが・・・





神苑会の業績⑺

御幸道路」竣工（65歳）明治43年（40年着工）

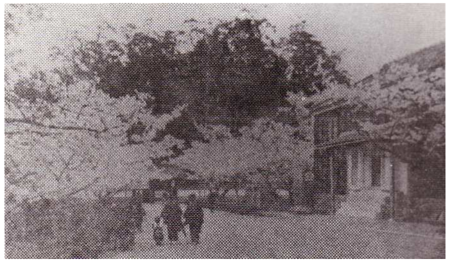
明治36年、岩渕（古市口）～久世戸（倉田山 神宮撤下御物拝観所）間の道路を敷設し、錦水橋を建設。さらに、内宮へ延伸して完成した。行幸の便を考え、新設されたため「御幸道路」または「御成道」と言われた。歩道の千本の桜・楓の植栽は御木本幸吉の寄付であったという 昭和9年に舗装された。

結果として、参拝経路から小三郎の備前屋があった古市遊郭は外れてしまい、古市の衰退に拍車が掛かったのは皮肉なものである。

明治18年 日本橋から国道2号を重複経由して四日市追分-内宮間の道路を『国道9号』に指定したが、大正8年に廃止された。次いで、大正9年、東京～内宮間の道路を『国道1号線』として明記された。神宮を国家の宗氏とする表れであったに違いないが、 昭和27年敗戦とともに廃止された。（写真）徴古館前の交差点から見た現在。道路両側にあった伊勢三宮奉賛献灯会が設置した燈籠郡は、バス事故を発端として、2018年にほぼ撤去された。

豊宮崎文庫」献納　（６６歳）明治４４年

慶安元年１６４８、外宮権禰宜・出口延佳のぶよしの提唱により神宮養成学校兼図書館として豊宮崎文庫が創設され、内宮の林崎文庫」と並んで、書籍の収集・収蔵、学問所として長く栄えたが、明治元年に廃止され宮崎学校が開設された。同１１年火災により講堂が焼失し、厄災を免れた２万余冊の書籍類等を西田貞助（旅館　宇仁館館主）から買収し、神宮へ献納した。それらの書籍類は現在、神宮文庫に所蔵されている。現在は建物として三間棟門と練塀のみが残っている。（上３）桜の名所として知られていた（下）現在



神苑会」解散　（６６歳）明治４４年

明治１９年に結成された神苑会は当初の目的を果たし、神宮に献納物品を引き継ぎ、同４４年に徴古館前にて解散式を挙行し、潔く解散した。

昨今、天下り官僚の受け皿となった外郭団体や法人の存在が問題視されたことがあったが、この潔さを見習うべきではなかろうか。これも太田小三郎の性格によるものであろうか？神苑会の解散を記念し、倉田山公園入口に記念碑を同年建立した。碑文は次頁の通り。

神苑會記

海軍大将大勲位功三級威仁親王題額

天祖建極垂統徳配天地　神宮之尊厳　億兆崇敬焉　迨王綱解紐、武臣専
権　禁制漸弛　至有褻瀆霊境者　可勝歎哉　明治維新　百度更革　北此未復
古　郷人夙圖廓清　十九年遂創設神苑會　百方経紀　事始就緒　朝廷賜
金　神宮司助資　會員頓加　醵金亦不尠　因奉有栖川宮為総裁　嘱顕官名
士　分擔會務　於是在　内宮　撤民屋五十六戸　拓土七千五百三十歩　在　外
宮　撤民屋百二十七戸　拓土　一萬二千五百七十　一歩　開園地　植花木　以
為神苑　旁購山林五十萬余歩之地　以添内宮風致　又買収倉田山凡三
萬余歩　誅荊棘　填谿壑　刱建徴古農業二館　品彙類集　以供衆庶観覧　霊
境之宏麗荘厳　迥軼前日　神苑会之功　可謂偉矣　項者会員胥謀　欲樹百
勒記　以伝千後　徴余文　乃敍其梗概云

明治四十四年三月帝室博物館総長正三位勲　一等股野琢撰并書

記念碑裏の神苑会会頭を始めとする理事・評議員・監事の名簿が記載されているが前述しているのでここでは割愛する。

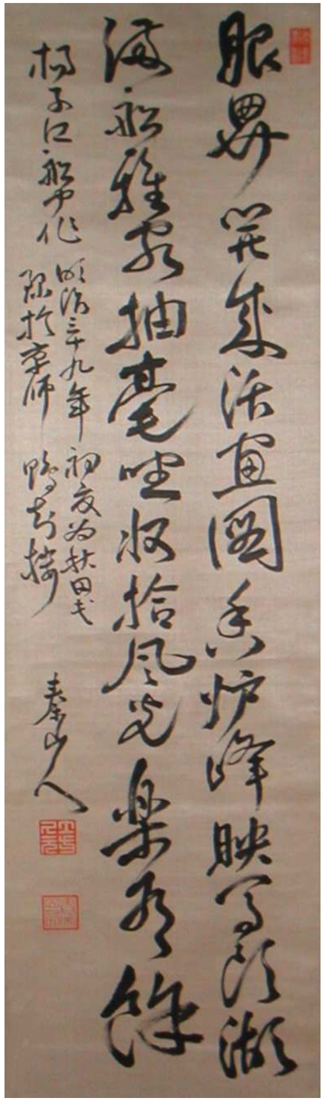
蛇足であるが、その中の 評議員正二位勲 一等伯爵 土方久元」に関して、拙家に伝わる 書」があったので紹介する。神苑会の会員の 一人だった曽祖父、秋田喜助と何らかの親交があったのだろうか？

土方泰山久元 伯爵

天保4年1833土佐に生まれ、大正7年1918に没している。享年86歳。号を泰山という。幕末・明治の勤王の志士である。土佐勤皇党に参加し、藩命に因って上洛し、三条実美の信を得て学習院御用掛となり 七卿落ち」に随行し、中岡慎太郎と共に薩長同盟に尽力し、維新後は明治天皇に信任されて宮内大臣・宮中顧問官・枢密顧問官などを歴任した伯爵で、のち明治政府に出仕し、のち元老院議官・宮中顧問官・枢密顧問官・農商務大臣等を歴任した政治家ある。神苑会評議員の一人。

(上)眼界開成活畫図香炉峰映馬頭湖
　満舩雅客抽毫坐収拾風光楽有餘
　楊子江舩中作　明治三十九年　初夏為秋田氏
　録於京師　鴨知楼　秦山人

(下)萬福来　大正六年秋　為石野氏　清嘱　八十五叟　正二位久元



太田小三郎没

大正5年（71歳）

小三郎はいろいろな事業を手掛けたが、伊勢電気鉄道㈱社長として天寿を全うした。妻くに、光熙とともに久世戸墓地に墓がある。小三郎が没した直後と思われる時期に、小三郎が家勢を挽回した備前屋は光凞によって売却されたと思われる。家業が時代にそぐわないと判断したのであろう。また、昭和9年、、神宮司庁が主導し、清浦伯爵を総裁として宇治山田市長等発起人となって、倉田山公園のそば、現在の神道博物館の丘下の広場に　太田小三郎君紀功碑」が建立された（写真下）。

墓誌

君諱小三郎号長山太田氏初名匡 一豊前国
彦山鷹羽寿 一郎三男贈正五位鷹羽浄典弟
也維新之際従浄典君奔走干諸藩之間浄典
君遂遭害君亦○履危○従奉亡足遺骨帰彦
山明治五年移伊勢山田嗣太田氏君為人○
償抱済世之志乃設神苑会造両宮神苑又創
参宮鉄道会社為社長山田銀行頭取伊勢電
気鉄道会社社長宇治山田市参事会員皆其
所放歴君少時学干広瀬氏宣園平生以読書
為○至晩不倦○政府君労績賜金盃以賞
之大正五年九月五日以疾歿距生弘化二年
正月廿八日享年七十有二越十月二十三日　（蝮尾とは久世戸墓地のある場所の地名）
葬干蝮尾元原配西川氏無子養大庭光煕為　（元原配西川氏＝妻くにの姓か？）
嗣又養元田善男為次子　（元田善男＝だれ？）
大正六年六月建　石匠　大阪天満平清

太田小三郎君紀功 （昭和58年伊勢高歴史部資料）

正二位勲一等伯爵清浦奎吾題額
君本姓庸羽初称匡 一嗣太田氏改小三郎弘化二年正月生於豊前英彦山
少学経史能詩文幕府末造 一山志士勤労王事伯兄浄典等殉大義君亦
備嘗艱苦　王室中興人京師受三条相国知遇明治五年来伊勢拝
神宮見　宮垣咫尺肆廛密邇煙塵叢襍深憂其褻黷尊厳慨然有廓清之
志而事体重大難遽　措手乃定居山田桔据累年条画粗成県令石井君見而
題之市都有志亦楽成其事於是列名倡設神苑会奉　一品熾仁親王為総裁
会長評議諸員並推当世名卿疏告四方勧集義捐事　聞賜内帑金以奨
之衆心感激踊躍従事乃於　内外宮下収私地二万余歩撤民房 一百八
十餘戸刻其敝壌代以浄士植卉木○池溝因天造之勝加人工之美別買民
材五十余万歩付人　神域更於倉田山営別苑三万余歩築徴古農業二

館工完物備帰属諸　神宮朝議嘉君労績賞錫三套金盃実明治四十五
年也君於一境利沢靡不尽心如鉄路銀行電車電燈請業皆其所経始也大
正五年九月以寿七十二終士民追思久而弥切遂与遠近同士謀刻石紀功
垂之不朽由廉乃據所聞見叙其大概如此

宇治山田市長正七位勲五等福地由廉請　香川長尾甲書

昭和九年十一月五日　東京　石勝刻

（碑裏面）太田小三郎君紀功碑建設会

名誉総裁　伯　爵　清浦　奎吾
名誉顧問　枢密顧問官　元田　肇
同　神宮大宮司伯爵　三傑西実義
会　長　福地　由廉
副会長　河村清兵衛
理　事　杉本斎之助

小三郎君紀功碑そばに、盟友　大岩芳逸翁の碑が大正9年建立されている。

あとがき

小三郎の活動を現在に活かすために　太田小三郎を支えたもの」は何であったか、それを現在に活かすには？ということを考えてみたい。

(1)活動の原点は明治維新後の政府を主導した三条実美の意志を支えた忠義心ではなかったか？それに応えた実美の協力や人脈が小三郎の活動を支援したように思う。

(2)勤王の志士としての活動を通じて、のちの明治政府の重鎮となる　尊王派」などとのさらなる繋がりがあった。

(3)代々務めた役職からの高い庶務処理能力があったに違いない。

(4)伊勢の人じゃなかったという面も大きい。地元の人々にはいろいろな因果関係があり、船頭多くして船進まずの例えがある通りで、客観的に問題点を傍観できた。

(5)小三郎の冠位を好まない実直な人柄がリーダーシップを支えた。潔ぎよい神苑会の解散は述べたとおりではあるけれど、伊勢におけるこれらの活動の傍ら、英彦山の義僧の供養やその遺族のための支援、英彦山殉難録」の編纂に対する資金援助など、実に思いやりのある活動をしている。

時代の背景も味方している。

(6)王政復古への急速な転換を図りたい政府の思惑、つまり、天皇の神格化や国家神道が、日本の総氏神として伊勢神宮の権威を高める必要があった。それと合わせて文明開化により経済機構の変革、交通網の整備など社会的基盤が急速に変化した。

(7)反面、明治4年の御師制度廃止により参拝客が激減していて、伊勢自体も急速な変革を求めていた。

これらのことが小三郎の「神都伊勢」を創出しようとした活動を支えたと考えているけれど、小三郎が求めていた伊勢の変革は現在、出来ているのでしょうか？

完

謝　辞

郷土史研究家　飯　田　良　樹　氏

伊勢郷土史研究家　山　田　修　司　氏（ブログ「いにしえの伊勢」）

伊勢志摩さいこう会　飯　田　ヨ　シ　子　氏

には写真や錦絵、資料のご提供やご指導をいただき、誠に深謝に堪えません。有難うございました。

参　考　文　献

伊勢市のあゆみ　昭和33年伊勢市教育委員会

伊勢度会人物誌　昭和50年伊勢印刷工業

神都名家集明治34年　三谷敏一

勢伊志紀顔見評判記　諸名士大一座　明治28年川口瀧造

宇治山田市史　復刻版　昭和47年三宅書店

伊勢市史近代編　平成24年　伊勢市

神苑会史料　明治44年　神苑会清算人事務所

宇治山田明治年代記　昭和57年　三重県郷土資料刊行会　倉田正邦校訂

幕末秘史　英彦山殉難録　昭和４０年　高千穂有英
維新史稿　日子山義僧伝　野史臺出版　明治３０年
郷土史草４３～４６号　神都計画とその背景　阿形次基
神苑会と宇治山田-近代的聖地の形成をめぐって-」ジョン・ブリーン
伊勢神宮の近現代史　神都物語」　平成２７年　ジョン・ブリーン
ふるさとの想い出写真集明治大正昭和伊勢二見小俣　昭和６１年　国書刊行会
図説　伊勢・志摩歴史下巻　平成４年　郷土出版社
目で見る伊勢・志摩の１００年　平成２年　郷土出版社
神都線（廃線記念アルバム）昭和３６年　三重交通㈱総務局編集
神都線の電車　平成２１年　勢田川出版
滋賀大学経済学部研究年報Ｖｏｌ．１０
大正バブル期における起業活動とリスク管理」平成１５年小川　功
三条実美　維新政権の　有徳の為政者」平成３１年内藤　一成　中公新書
オンライン百科事典ウィキペディア
インターネット百科事典コトバンク　ほか

筆者紹介

昭和２３年伊勢市大世古町に生まれ、昭和４７年慶應義塾大学工学部電気工学科卒業後、日本ビクター株式会社勤務し、レコード、ビデオディスク、ＤＶＤ、記録ディスクなどの開発に携わり、退職後、技術コンサルタント会社を起業、現在に至る。実家の掛軸を受け継いだことから、その調査を経て、伊勢の近代史を研究するに至った。

著書、伊勢度会近世名軸図鑑、伊勢参宮近世名所図会、御師大研究などの自主製作本は三重県図書館や伊勢図書館に収蔵され、閲覧できる。

研究結果は、ホームページ http://nfc.no.coocan.jp/index.htm でも公開している。